

昭和戦前・戦中期の福田恆存

原点としての「凡俗の倫理」

川久保剛

はじめに

昭和期日本の代表的な思想家に福田恆存（一九二―一九四）がいる。福田が活躍したのは主に戦後であった。それゆえ福田に関して、戦後に焦点を当てた考察が大部分を占める。しかし福田の思想的原点は、戦前・戦中期に求めることができる。それゆえ、福田の思想を理解するに当たっては、この時期の検討が不可欠となる。しかし、これまでの福田研究ではこの点あまり重視されてこなかったといえる。

この時期の福田に関する主な先行研究としては、荻久保泰幸「福田恆存覚書―戦中から戦後へ」（『昭和文学研究』一九八五年二月）と川村

湊「福田恆存の日本語・時枝誠記の国語」（『海を渡った日本語』青土社、一九九四年）、それに金子光彦『福田恆存論』（近代文藝社、一九九六年）

がある。しかし、荻久保論文は副題に伺われるように、昭和一八年前後から敗戦に至る時期に限定した考察となっており、また川村論文は題目の通り福田の日本語論に主題を限定している。つまり、戦前・戦中期の福田の思想を全体的に扱ったものではない。金子書はこの課題に取り組んでおり、参考になる点が多いが、初出論文ではなく戦後に単行本に収録されるに当たって改稿の施された論考に依拠している点⁽¹⁾、またこれと関連して単行本に未収録の論考に当たっていない点、さらにいくつか主要な評論に触れていない点などに研究方法上の問題点を認めることができる。また当時の思想状況との関連の把握が

十分ではないため、福田の思想史的位置と意義が明確となっていないという難点も抱えている。

そこで本稿では、可能な限り初出論考に依拠しながら、また単行本に未収録の文章にも当たりながら、戦前・戦中期の福田を同時代の知的状況と関連づけて全体的に検討し、その思想の位置と意義を明らかにしたい。

この時期は福田にとって、学生時代とその後の新進気鋭の文芸批評家としての活動時期に重なる。結論を先取りすると、この時期の福田は、〈近代的我自我〉の再検討を自己の思想的主題としていた。近代の原理である人間の「自我の権威」に対する批判的検討である。「自我の権威」の根拠には、おもに「理性」と「個性」という二つの観念に対する信頼が存在したといえる。この時期の福田は、このうち特に、「個性」概念に対する懐疑を主題としている。〈近代的我自我〉の権威を説くにあたって、「理性」概念を根拠にするのが啓蒙主義であり、他方の「個性」概念に基づくのがロマン主義であるとすると、この時期の福田はロマン主義に対する批判意識をもって特徴づけることができるといえよう。

福田によれば、人間を、「個性」的な内面性や豊かな人間性を備えた個人、と捉える近代的・ロマン主義的人間観は根本的に間違っている。むしろ人間は、「個性」なき「空虚」な内面を抱えた「凡俗」・「凡人」として理解されるべきである。この時期の福田は、このよう

な反近代的な人間観の提唱によって特徴づけることができる。もちろんこの時期、〈近代的我自我〉の批判的検討に取り組む論者は福田の他にも数多く存在した。むしろそれはこの時期の日本の思想界の共通テーマであったとさえいえる。第一次大戦後の西欧における反近代の潮流が日本にも流れ込み、〈近代的我自我〉に対して懐疑の目が向けられつつあったのである。しかしそこで批判の対象とされたのは、主として「理性」や「人格」など啓蒙主義的な概念であって、福田のように「個性」概念に焦点を当てて〈近代的我自我〉を批判的に検討する論者はほとんどいなかったといえる。たしかに後述のように、『コギト』グループなど福田と近い問題意識を追究した論者も存在したが、福田ほど全面的かつ継続的にこの問題に取り組んだものはいなかったといえる。ここにこの時期の福田の独自性を認めることができる。また福田は、単に「個性」的人間という見方を批判して、人間を「凡俗」と捉える人間観を提示するだけでなく、「凡俗」的人間の確立すべき「倫理」についても提言を行っている。ここにも、この時期の福田の特徴を確認することができる。

本稿ではこのような福田の反近代的な人間観の提唱について見ていくが、それはまた、日中戦争以降の戦時体制下における知識人のあり方を問う福田の議論とも関連している。そしてそこには、戦後における福田の知識人批判論の原型を伺うことができる。本稿ではこれらの点についても検討を行いたい。

ところで福田は、戦前・戦中の時期に止まらず、戦後においても引き続き、人間を「個性」を備えた個人と見る近代的な人間観を再検討する議論を展開している。そこには、戦前・戦中の時期には見られなかった新たな論点も含まれている。本稿は戦前・戦中期を対象とするため、戦後の議論については扱うことが出来ないが、その要点については確認しておきたい。

また戦後の福田は、「理性」概念を根拠にした〈近代的自我〉論にも批判を向けている。その萌芽はすでに戦前・戦中に見られるが、戦後になると福田は、「理性」によって「自立」した〈近代的自我〉の確立を唱えたいいわゆる〈戦後啓蒙〉の議論に対立する形で、この論点を本格的に主題化している。この点もまた本稿では扱えないが、他稿で触れているので参照を願いたい。⁽²⁾

いずれにせよ、戦前・戦中から戦後にかけての時期の福田の問題関心の中心は、〈近代的自我〉の再検討にあったと思われる。繰返しになるが、本稿では、戦前・戦中に時期を限定してこの点に関する検討を行いたい。

以上から、戦前・戦中期の福田の検討は、福田研究並びにこの時期の日本思想史の研究において大きな意味を有しているといえよう。以下、まず(一)この時期の福田の〈近代的自我〉に関する批判的検討を概括し、次いで(二)その思想的な位置づけと意義づけを行い、最後に(三)戦中期の福田の知識人批判論の論点を、その〈近代的自

我〉批判論との連関や、当時の知識人社会の動向との関連をpushしえながら明らかにするという順序で、以上述べた事柄について具体的に考察を行いたい。⁽³⁾

一 福田の〈近代的自我〉批判論

福田は昭和一一年に東京帝国大学文学部英文科を卒業すると同時に最初の作品である「別荘地帯」(『演劇評論』昭和一一年四月号)と題した戯曲を発表しているが、そこですでに「凡俗」に関する問題提起が行われている。この戯曲は青年男女の恋愛劇であるが、その登場人物のせりふの中に問題の箇所がある。

確かに僕は孤独だ、だけど、それは他人の有つていないものを有つているからぢやあない。その反対。僕のような人間は何処にも有る、それを知っているから寂しいのだ。……僕のような凡俗が何で生きていく必要があるんだ?⁽⁴⁾

ここで「凡俗」は、没「個性」の人間を意味している。後論からも明らかのように、この「凡俗」の定義は福田の他の論考にも受け継がれているといえる。ここでは「凡俗」の自覚が「孤独」意識と結び付けられて論じられている点が着目される。絶対的な「個性」を帯びた

「天才」の「孤独」についてはしばしば論じられるが、福田は「個性」に恵まれなかった相対的存在としての「凡俗」の「孤独」に光を当てており、そこにまずは彼独自の問題意識の現れを見て取ることができるといえる。

この「凡俗」の「孤独」という問題については、同年一月に執筆された評論「漱石の孤独感」(未発表⁵⁾)でも扱われている。この論考では、漱石における「俗人的自我」の自覚について論じられ、それが漱石の「孤独感」の原因であると指摘されているのである。

このように福田がまず、「凡俗」の「孤独感」を問題化していることが確認される。しかし福田の主要な関心は、むしろ「凡俗」の「自意識」の問題に置かれていたということが出来る。前者を扱った主な論考が上記の二作に止まるのに対して、後者に関する評論は以下に見るように多数存在し、しかもその多くが昭和一〇年代の福田の代表作だからである。

その最初の論考は、上記二作と同年の四月に執筆され翌昭和一二年に発表された「横光利一と『作家の秘密』——凡俗の倫理」(『行動文学』二月号。以下横光論と略記)である。ちなみにこれは福田最初の本格評論と見なすことができる⁽⁶⁾。この論考では「二十世紀」の「芸術家」及び「智識階級」が取り上げられ、その象徴として当時文学の神様と礼賛されていた横光利一が俎上に乗せられている。

福田は次のような西欧近代精神史の論述から始める。まずフランス

のランボーに体现されているように「十九世紀」の「芸術家」は文字通りの「天才」であった。しかし世紀の転換点を迎える頃になると、トーマス・マンの『トニオ・クレーゲル』(一九〇三)が描き出したように、「芸術家」の内面に「芸術家気質」と対立する「俗人氣質」が現れる。「芸術家は、己れの優越性と特異性の陰にひそむ不純な凡俗性を発見する」に至るのである。そして「二十世紀」の現代になると、「芸術家」の「気質」及び「血液」を全く持たない単なる「俗人」が「芸術家」を僭称するようになる。

智識階級的俗人は、その自由主義的機會均等の旗印のもとに、血液の存在を乗り越えて進まうとするのだ。(中略) 彼等は優越者たらんとする野望を、天才たらんとする野望を有つ⁽⁷⁾。

この「野望」を引き受けるものとして登場するのが「自意識」である。福田は「自意識」を「自我の特異性を夢見たものが、自我と他我との間に何等の差異をも認めえなくなつた時、忽然姿をあらはして、あくまでその特異性を強要」する「俗人」に特有の意識と規定する⁽⁸⁾。この「自意識」概念は、福田に独自なものであるといえよう。「自意識」は一般的にはその〈反省〉作用に光を当てて問題化されるが、福田はその「権力」作用に注目したといえる。

そして上述のように福田は、このような「自意識」に支配された

「二十世紀」の「芸術家」の典型として横光利一とその作品の主人公（福田は作者と主人公を同一化して作品を享受・批評している⁹）を挙げる。そしてその作品分析を通して、「二十世紀」の「知的俗物」の「自意識」がもたらす「倫理」上の問題について指摘する。

まず、「知的俗物」には「天才」に対する「復讐」感情や「嫉妬」心などの悪意が見られるという。福田はこの論考の第一章のプロローグとして、イギリスの文学者・思想家のD・H・ロレンスがその『アポカリプス論』（一九三〇）に記した「強きもの、権力あるものを倒せ、而して、力無きものに栄光あらしめよ、と弱者の宗教は教えた」という言葉を引用している。『アポカリプス論』は、新約聖書のヨハネ黙示録の独自の分析を通して現代人の病理とその克服の展望を示した書物である。ロレンスはその中で、ヨハネ黙示録が、「弱者」である大衆が「強者」である地上の権力者に対して抱く「復讐心」を宗教的に正当化した「権力」志向的な文書であると述べ、それがイエスの「愛」の教説と根本的に矛盾した精神であることを説いている。そして近代人・現代人の自我がヨハネ黙示録的な「弱者」の「権力欲」に支配されていると述べ、警鐘を鳴らしている。

福田はこのようなロレンスの議論図式を援用して、「天才」に恵まれない「二十世紀」の「知的俗物」を「弱者」と捉え、彼らが「自由主義的機会均等」の理念をかざして、精神上の「強者」である「天才」たちに否定的な心理を抱く様を問題化しようとしているのである

る。言わば「弱者」としての「知的俗物」のヘルサンチマン（怨恨感情）を批判的に問題化しているのである¹⁰。

また福田は横光作品に登場する男性知識人たちが自らの「特異性」をアピールする際に、その引き立て役として「女性」や「民衆」などを利用して点を抑え、「知的俗物」の「自己正当化」に伴う他者蔑視や他者に対する「無責任」な態度についても問題化している。この点と先の点を踏まえてであろう、福田はやはりロレンス『アポカリプス論』の「自己正当感、自惚、自己重視、而して秘かな嫉妬がその下に横たわっている」という言葉を第二章のプロローグとして掲げている。

さて、このように「自意識」の問題点を指摘した上で福田は、全ては「凡俗」が「凡俗」であることを否認する態度に問題があると見て、次のような提言を行う。

ここに自意識への誠実ではなく、凡俗の倫理が設定されねばならぬ。智識階級の倫理が建設されねばならぬ。（中略）われわれは横光利一の文学に、寛濶なる愛情を、温かい心を要求しよう。自己の凡俗を悟つた時、これ以外にわれわれ凡俗の信すべきものはあるであらうか¹¹。

「虚栄」心を捨て「凡俗」であることを受け入れよう、冷たい「自

意識」ではなく「温かい心」で他者との関係を築こう、これが「二十世紀」の「智識階級」の生き方を主題とする横光論の結論となっている。そのことはこの論考の副題に「凡俗の倫理」という用語が記されていることにも伺うことができる。この「温かい心」という視点は前述のロレンスの言うイエスの「愛」の教説に対応したものである。後述のように福田自身「温かい心」という観点がロレンス経由の着想であることを示唆している。

さて、このように「凡俗」の「自意識」を最初に問題化した論考である横光論ではロレンスの図式が分析枠組として用いられている。そのことは、全二章構成のこの論考において、両方の章ともに前述のロレンスの言葉がプロローグとして引用されていることにも端的に示されている。その内実は上述のように、ロレンスの「弱者」の「権力欲」論を借りて、「凡俗」の「自意識」の構造と問題点を明らかにすることにあった。⁽¹²⁾

そしてこの主題は、横光論の執筆（既述したように発表は翌年）と同年に執筆・発表された他の二つの文章にも共通して確認することができる。演劇時評「三月の作品」（『演劇評論』四月号）と文芸時評「リアリズムと批評の問題」（『日本記録』一〇月号）がそれである。前者では、「作家たる価値なくして、而も作家としての名声を誇りを得たい」という現代の芸術家の「卑しい虚栄」⁽¹³⁾が問題化されている。また後者ではやはり上述のロレンスの言葉を引きながら、現代日本の作家に顕

著な「ひとの優位に立とうとする卑しい努力」⁽¹⁴⁾や「民衆」に対する特権意識を問題化し、「作家自らの根本的な人間の価値といふ点では、彼等民衆と何等変る所のない俗人だと悟らねばならない」と説いている。⁽¹⁵⁾

そして同じことはこれらの文章に続いて発表された昭和一三年の論考「マクベス」（以下、マクベス論と表記）にも当てはまる。これは「一年待てども職なきため」⁽¹⁶⁾東京帝国大学文学部英文科の大学院に入学した福田が、「一年籍を置いた大学院のレポートとして」⁽¹⁷⁾大学院の論集に発表したものである。⁽¹⁸⁾

まず福田はシェイクスピアの四大悲劇の中で「マクベス」だけが異質であることを指摘する。他の悲劇の主人公たちは皆「高貴な精神」を持ち、「王者」の「血統」を引いている。しかしマクベスは、「高貴な王子の血脈」にも「個性」にも恵まれず、絶えず「心の空虚」を感じている「力の弱い」「凡人」である。しかし彼はその事実を甘受することが出来ず、「血統の純粹性と精神の高貴性とへの憧憬と復讐」に囚われている。⁽¹⁹⁾このようにマクベス論にも横光論などと同じ論法を確認することができる。

しかしこの論考には新たな論点も見取ることができる。まず第一に、それまでは「智識階級」に限定した形で論じられてきた「凡俗的自我」の問題が、マクベス論では「近代人」一般の問題として改めて論じ直されている点である。福田は次のように論じている。

シェイクスピアはその豊富な想像力をもつてルネサンスの子であったと同時にやくもルネサンスに反逆している。自我解放の喜びにかれほど酔い痴れた詩人もなかつたが、しかも解放されて仕へるべきなものもたぬ自我の不安は『マクベス』をとほしてかれのうちにしるびこんでいるのだ。⁽²⁰⁾

解放さるべき個性の実体とはなにか。ハムレットにしてデンマークの王子でなければ野心家マクベスたらざるをえないのではな
いか。⁽²¹⁾

福田の関心はあくまでも「個性」無き「近代人」の「自我」の問題に向けられているのである。横光論などで展開された「知識階級」批判もその文脈に発しているといえる。「知識階級」は「個性」を一つの指標とする「近代的自我」を身につけた存在と見なされていたがゆえに、福田の「近代的自我」批判はまずもって「知識階級」批判として現れたのである。

新たな観点の第二は、「宿命」という観念の主題化である。「マクベス」において福田は、自己の「宿命」を求めて得られず苦悶するマクベスの姿に光を当てている。マクベスは「自己の歴史を自己のうち内化する力によつて書くことができぬままにたえず心の空虚を感じ」ている人物として描き出されているのである。この「凡人」における

「宿命」の欠落という問題は、後述のように、「嘉村磯多」論でも扱われている。またこの問題は戦後の福田の主要テーマともなった。⁽²²⁾ その意味で福田の生涯を貫く主題であったといえる。その最初の現れをここに確認することができるわけである。

さて、このように福田は、ロレンスを参照しながら、「凡俗」としての「知識階級」及び「近代人」を支配する「権力」志向的な「自意識」を一貫して問題化していると指摘することができる。しかしこのような福田の問題構成は、マクベス論を最後に姿を消すこととなる。

代わって登場するのが、「凡俗的自我」への凝視を通して「芸術」領域に新たな次元を拓いた芸術家に対する関心である。その問題意識は、次に見るように、作家の嘉村磯多と芥川龍之介の「芸術」方法の解明を通して追求されたということが出来る。自我論の探究を通して、「凡俗」としての自己の甘受に「近代人」の生き方を見出した福田は、その立場に立脚して新たな「芸術」の方法論を打ち立てようとしたといえよう。

まず昭和一三年と一四年に発表された「一作家に於ける羞恥の感情」(『文学』昭和一三年一月号)と「嘉村磯多」(『作家精神』昭和一四年三月号)の二つの嘉村磯多論(以下、嘉村論と略記)から見よう。この二つの評論は論旨を同じくしているが、後者の方がより本格的な論述となっている。そこで以下後者に依拠して考察を進めよう。

あまり知られていない事実であるが、嘉村は福田の学生時代、横光

と並んで文学青年からの尊敬と注目を最も集めた小説家であった。⁽²³⁾ 嘉村は自己の「罪業」とそれがもたらす「羞恥」の意識を赤裸々に綴った私小説を本領としたが、福田はその内面の葛藤について次のように解説する。

嘉村は信ずべき自我を有たずして、その故に己が身の罪業を頼つたのだ。ここに嘉村磯多の自意識がある。自我の真实性を信じ得ぬ者にとつては宿命の名こそ自己の存在を証明し支えてくれる唯一の实在であろう。それがよし輝かしきものであれ、呪はしきものであれ。⁽²⁴⁾

マクベスと同様、嘉村も、「宿命」を希求する。しかし嘉村は、「罪業」という自己の「宿命」が「自意識」の捏造による「虚構」であることに気づく。そこから「凡俗」としての自己の自覚と受容に至る。

自我の姿とは（中略）、実は罪に翻弄されるところに足らぬ凡胎であつた。罪とは遂に自己を離れた外のものであり、自己は唯の無に過ぎぬ、それは善でもあり得、悪でもあり得る果無き存在である。⁽²⁵⁾

そして嘉村は「愚物は吾れ自ら、一個の愚物に何が為し得るか、といふ問を賭けた、そして自ら応えた、矜りを傷つけてまでその愚を描

く芸術が存在する、と。彼は完なきまでに描いた、凡胎の演ずる凡ゆる痴態と滑稽と虚構とを」。このように述べて福田は「凡胎のわれわれにとつて其処に救ひを予想せずして何処に安住の棲家があらうか」と問いかげ、「嘉村磯多ほど真剣に究局まで自意識を遂ひ籠み、それに詰め腹を切らせたものがいくたりあつたであらう。彼の文学は陰に驕れる成算なくして自意識を斬つた最初のものであつた」と高く評価する。⁽²⁶⁾

福田は、嘉村を媒介にして、言わば「凡俗」の「芸術」とでも呼ぶべき方法を提唱しているといえる。この方法は上述のように、「凡俗」としての自己の甘受を出発点にしている。そこに、横光論で提唱された「凡俗の倫理」との共通性を確認することができる。福田は、「凡俗」としての自己の甘受という自らの思想的立場から「芸術」の方法論を構想した。そして「凡俗」の「芸術」という方法を見いだした。その言わば触媒となつたのが嘉村磯多であつたと見ることができよう。

そして同じ問題意識から福田は、次に、芥川龍之介を発見することになる。

福田は昭和一三年三月に大学院を修了し、同年五月から静岡県掛川中学校に赴任し、翌昭和一四年七月に退職する。嘉村論はこの間に発表されている。そして昭和一四年二月から、古今書院の新雑誌『形成』の編集者となる。おそらくこのような身辺の慌しさと仕事の

都合からであろう、嘉村論ののち約二年間文章を発表していない。しかし昭和一五年七月号をもって『形成』が終刊を迎えて以降、福田はふたたび上述の問題関心を主題化した評論を発表し始める。昭和一六年から一七年にかけて断続的に発表された、次に挙げる五つの「芥川龍之介」論がそれである。「芥川龍之介論（序説）」（『作家精神』昭和一六年八月号）、「芥川龍之介について」（『文学』同年八月号）、「芥川龍之介の比喩的方法」（『新潮』同年同月号）、「古典と現代——再び芥川について」（『新文学』昭和一七年一月号）、「文化意思について——芥川論」（『新文学』同年五月号）。

福田の「芥川」論の骨子は最初の「芥川龍之介論（序説）」で提示されているといえる。これに続くその他の論考はその中の個別の論点について詳論したものである。それゆえここでは「芥川龍之介論（序説）」に依拠しながら福田の議論を辿ることにしよう。

福田によると、芥川の内面には、「もっとも美しきもの、最も高きもの」を「冀^{こひねが}ふ」人間が同時に自己の内部に「最も卑しきもの、最も俗なるもの」を見出してしまおうという「自我」の分裂状況を見て取ることができる。

過去に聳える巨大な精神を仰望しつつ、芥川龍之介は自分自身の裡に香具師を感じていた。⁽²⁸⁾

しかし芥川はその矛盾を止揚しない。むしろその矛盾を生きようとする。そこに福田は、芥川の「純情」を見る。

彼の純情は人間の昇りうる最高位を常に憧憬してゐる。一面自我の現実をうしろめたく羞恥してゐる。⁽²⁹⁾

最高位を憧憬し、現実を羞恥するといふ事実そのものを羞むること、而も（中略）自己の純情をすら羞恥してゐるのは、理智でもなく自己意識でもなく、純情自体であるといふことである。⁽³⁰⁾

しかしその「純情」は、芥川を苦しめ続けることになる。芥川の精神は、「最高位」の精神の歴史的「系譜」である「血統」の「厳粛さ」からも、自己の内なる現実である「現代の卑俗さ」からも、ともに拒絶されているからである。しかし芥川はその状況に対して「全力の力を揮つて反発」する。

そこに偉大なる「血統」に対する「親近」感と「疎外」感が織り成す「イロニー」の意識が芽生える。

血統それ自身に否定され、自らその事実を知りつつなほも血統に参与しようとする近代的イロニー⁽³¹⁾

そしてそのような意識から「比喩」（『寓話』）という芥川の「芸術」

の方法が生み出された」と福田は見る。

己が血統を感じるものにその参与を拒絶される虞れに絶えず脅かされてゐる時、追ひ詰められた方法として取上げられた比喩⁽³²⁾

これ(比喩——引用者注)こそ直接法を以てしては何人にも信じて貰へぬ精神が、自ら発見した方法⁽³³⁾

「比喩」は、「血統」と芸術家の自己とが「結縁し反発する行為」を通じてともに「並び立つ」ことを可能にする方法という様にも説明される。福田は、このように芸術家としての「態度」と「方法」に自覚的な芥川の作品を「批評芸術」と呼び、高く評価する。

その上で、福田は「芥川龍之介は比喩を語つた、と僕は書いた。しかし僕自身が芥川を比喩として借りている」と述べる。これは芥川に対する福田の「親近」感と「疎外」感に彩られた「イロニー」の意識の表明であろう。それゆえ福田は、次の言葉でこの評論を締め括る。

僕は必ずしもロマンテイツシェ・イロニーを装ふものではない。がイロニーは親近に疎外を語る批評の蔽ひがたい表情ではなからうか。⁽³⁴⁾

このように福田の「芥川龍之介論(序説)」は、それ自体が一つの

「批評芸術」として意図されていると考えることができる。

では福田の芥川論で提示された「比喩」という方法は、先の「凡俗」の「芸術」論とどのように関係しているのだろうか。結論的にいえば、この二つの方法は、自己の内部の「凡俗性」の直視と甘受をその出発点としている点で共通しているといえることができる。

ここまで見てくれば、「凡俗」としての自己の甘受こそがこの時期の福田に一貫する思想的主張であったということができよう。

では、以上に見た「近代人」の自我をめぐる福田の議論は、当時の思想動向の中でどのような位置を占め、またそこにはどのような意義を確認することができるのであろうか。次にこの点について明らかにしよう。

二 福田思想の位置と意義

ここでは、以下の五つの論点の検討を通して、この時期の福田の議論の思想的位置と意義を浮き彫りにしたい。

まず一点目は、福田と雑誌『コギト』グループとの関連についてである。雑誌『コギト』は、大阪高等学校の同窓生によって、昭和七年に創刊された文芸・思想に関する同人誌であり、昭和一九年まで刊行された。その代表的な同人には、保田与重郎(一九一〇—八二)、中島栄次郎(一九一〇—四五)、松下武雄(一九一〇—三七)などが

た。彼らは福田より二つ年長の同世代の論者であった。この雑誌はのちの『日本浪漫派』（昭和一〇年三月創刊）の母体の一つである。

ここでは、彼らによる、「凡人」の「芸術」という問題の提起に着目したい。

保田は、ドイツロマン派を代表する文学者であるフリードリヒ・シュレーゲルを主題化した論考「ルツインデの反抗と僕のなかの群衆」（『コギト』昭和九年一月号）において次のように述べている。

自我をはつきりよりどころにとらへとうと努めた人間が、つひにあくまで対立し矛盾している自我をみいだした。（中略）自我は矛盾そのものである、絶対者はただよつてゐる、結果己は下らぬ。矛盾から無為の美を考へるとき、作品ルツインデは、己が下らぬ人間だ、との自覚から藝術家の終生の仕事を始めるものの手によつて構想される。

汝自身を知れ、それがヘラスの謎か、ないしはその人々の覚悟の程か、僕は誰からも聞いていない。しかし藝術家が身を以て体験したものは、下らぬ己の自覚に他ならない。しかもさういふことばによつて彼らは高邁な自己の精神を主張せねばならぬ。パラドクスは善にして偉大なものである。イロニーはパラドクスの形式である、ふとそんな意味深長な放言をシュレーゲルはしてしまふ。⁽³⁵⁾

保田にとって、近代の芸術家とは、徹底した自己分析によって、「高邁な自己」と「矛盾」・「対立」する「下らぬ己」の存在を発見し、その自己認識に立脚して芸術する者を意味した。保田はこの論考の別の箇所で、「下らぬ己の自覚」こそが近代の芸術家の指標であり、その自覚の濃度がそのまま「藝術的濃度の尺度」ともなると述べている。

このような問題意識は、中島栄次郎にも見られるものであった。そのことは次に挙げる保田の文芸時評「二つの評論（新しき芸術学への試み）」（『コギト』昭和七年七月号）から伺うことができる。

大東（松下の当時のペンネーム——引用者注）・沖崎（中島の当時のペンネーム——引用者注）が偶然にも考察の基本的内部構造に於て相共通の点を持っているのは久しくわれわれが手をたずさえて進んできた好ましい成果とも考えられる。ただ大東のものがより多く天才の道を拓くことにあつたとすれば、沖崎にあっては日常性の人間から藝術するという高次の存在へ近づきうる道を示すものだ。これは天才の道ではなく凡人の藝術し得る道だ。私は沖崎の論文に於て鬱勃たる作家の態度を見る。それは作家として述べられた藝術への道であらう。⁽³⁶⁾

このような『コギト』同人に共有された、「凡人の藝術し得る道」

の探究という問題意識に、福田の「凡俗」論との共通性を確認することが出来よう。⁽³⁷⁾

『コギト』グループの執筆活動は福田よりも早く始められている。おそらく文筆家としてデビュー前の福田は、保田たち『コギト』グループの議論から影響や刺激を受けたものと思われる。とくに保田との接点は重要なものであろう。この時期の福田には、「凡俗」論以外でも、前述の「イロニー」や「血統」など、保田の批評用語の影響が見られるからである。⁽³⁸⁾ 後述のように、戦時中に無責任な日本賛美の言説を展開した日本浪曼派の論客としての保田とは一線を画した福田ではあったが、近代芸術のあり方を模索する『コギト』の批評家としての保田とは問題意識の共有があったと指摘することができる。⁽³⁹⁾

福田と保田との交流に関しては、壇一雄『太宰と芥川』（沖積舎、昭和四三年）の次の一節が知られている。「保田与重郎の家で、時に、ツルのようにやせて、学生服に身を包んだ、福田恆存氏の姿を見かけたような記憶もある」。⁽⁴⁰⁾

二人の交流という点に関しては、ドイツ文学者で評論家の高橋義孝（一九二二—九五）の存在が重要かもしれない。福田と高橋は同郷（東京・下町）同年であり、小・中学校以来の親友であった。⁽⁴¹⁾ 大学も同じ東大であり、高橋は独文科、福田は前述のように英文科であった。二人は東大時代も交流しており、福田に同人雑誌『行動文学』への加入を誘ったのも高橋であった。前述のように福田はこの雑誌に処

女評論である横光論を発表することになる。その高橋は、独文科の演習などを通して、ドイツロマン派に関心を持つ保田（東大美学科）と面識があった。⁽⁴²⁾ 高橋は何度か『コギト』にも文芸評論を寄稿している。このようなことから、福田は高橋を通して保田と交流する機会を得たのではないかと推測することもできる。ちなみに高橋が『コギト』に寄稿した論考の一つは「文学史——血統の問題——」（『コギト』昭和二年二月号）と題されており、『コギト』グループや福田との問題意識の共有を伺わせる。

ちなみに、この時期の福田と高橋はセットで捉えられることが多い。二人とも『行動文学』の後身である第二次『作家精神』に同人参加しているが、同じく同人であった同世代の作家・野口富士男は、この雑誌は「高橋義孝と福田恆存を文芸評論家として羽ばたかせる基地となった」（『感性的昭和文壇史』文藝春秋、一九八六年）と回想している。⁽⁴³⁾ また日本近代文学研究家の紅野敏郎は、第二次『作家精神』の後身で、やはり二人がともに同人参加した雑誌である『新文学』に触れて、「福田恆存・高橋義孝らの本領を発揮した場所」（『昭和文学の水脈』講談社、一九八一年）であったという見方を示している。福田と高橋は、ともに『コギト』グループと接点を持ちながら、自己の主題を深め、徐々に頭角を現しつつあったと見ることができよう。

次に二点目に移ろう。文芸批評家の小林秀雄（一九〇二—八三）との関連である。小林は福田より一〇歳年長である。福田は戦後に発表

した「誠実といふこと——小林秀雄との出あひ——」（『文藝評論』昭和二年四月号）や「叙事詩への憧れ——偶然にまかせて選んできた書物——」（『日本読書新聞』昭和二年九月一日）などの文章で、戦前に小林のジード論から大きな影響を受けたと回顧している。⁽⁴⁴⁾

小林は、「アンドレ・ジード」（『岩波講座・世界文学』第五卷、昭和八年）において、フランスの現代作家・ジードは、「創造力に富んだ」「天成の作家」ではなく、「苛烈執拗な自己解剖家」を本質とする作家であると論じている。さらに小林は、ジードの「藝術」の特徴を、徹底的な「自己解剖」によって明らかとなった「心の矛盾と錯雑」を抽象的なレベルで解決するのではなく、そのままの状態を調和させる点に見出している。小林は「虚偽なく生活する為には矛盾といふものは必至なものだ、この矛盾にある種の平衡を付与するに藝術は必須なものだ、これが広い意味で、一貫した彼の作家たる処世理論である」と述べている。小林はこのような過剰な「自己解剖」による自己分裂及びその認識を基礎にした「芸術」の方法の模索の問題を「ジード的問題」と呼び、それが「近代」に特有の問題であると論じている。⁽⁴⁵⁾

福田は前述の「叙事詩への憧れ——偶然にまかせて選んできた書物——」において、学生時代の読書体験を振り返って、「ブレイクもワイルドもロレンスも、悉くジードへの偏向において読んでいたとはいえよう。小林秀雄のジード論がその端緒をなした⁽⁴⁶⁾」と回想している。小林の提起した「ジード的問題」が福田に影響を与えたことはおそら

く事実であろう。そのことは、今見た小林の議論と前項で見た福田の自我論とを照合すれば一目瞭然であろう。前述の福田の戯曲「別荘地帯」には、「何一つ逃すまいと見張っている意識⁽⁴⁷⁾」に囚われた青年が登場するが、これは福田の自己投影であったと見る⁽⁴⁸⁾ことができる。福田の場合も、小林や保田と同様、近代人特有の過剰な「自己解剖」が、分裂した自我の姿を浮き彫りにし、それが新たな「芸術」の構想という問題に結びついて行ったということができよう。その意味で彼らはまさに「近代」という時代を象徴する精神であったといえることができる。

小林との接点はこれだけではない。小林は「凡俗」としての自己という観点も問題化しており、ここにも福田との共通性を捉えることができる。小林は「Xへの手紙」（『中央公論』昭和七年三月号）において、「人並みに三十になって、はじめて自分の凡庸がしみじみと腹に這入った」、「幾度見直しても影の薄れた自分の顔が、やっと見えだしたと思つた途端、こいつが宿命的にあんまりいい出来ではない事を併せて見定めた。お陰で（このお陰でという言葉を忘れてくれるな）今の俺はいわゆる余計者の言葉を確実に所有した。君は解るか、余計者もこの世に断じて生きねばならぬ⁽⁴⁹⁾」と論じている。

福田のみならず、保田でも、小林でも、この時代「自己解剖」を徹底した論者たちは、等しく「凡俗的自我」の発見に直面し、その「処世」や「芸術」の問題の探究に向かつていったといえることができる。

う。またそれは、彼らにおける「高貴」で「個性」的な自我に対する希求を逆に明かしているともいえよう。

しかし、彼らの中で以上の問題を一貫して探究したのは福田のみであるといえよう。次項に見るように福田は、戦時中も「凡俗的自我」論の視点から「戦争と知識人」の問題にアプローチしている。また戦後も引き続きこの問題に取り組んでいる。しかし、保田や小林は、昭和一〇年代半ば以降徐々にこの問題から目を逸らして行った。保田は「イロニーとしての日本」の賛美に向かい、小林は、過去の「天才」に没入していった。戦後の福田は小林への尊敬と共感を前提にしつつも、次のように疑義を呈している。

かれ（小林——引用者注）は十九世紀小説や私小説のうちに、ほとんど救ひがたい近代自我の限界をみとめたのであるが、そこから二十世紀への血路を見いだすことができなかつた。現代の凡庸性のうちにはなく、過去の天才のうちには身をかくした。（中略）見えすぎる眼がどうして現代のドラマを見ないのか、鋭い感受性がどうしてその苦悶に感動しないのか。それはくだらぬことかもしれぬ、まちがっているかもしれぬ。が、たとへさうだとしても、ある時代がある時代に優つていたり劣つていたりするわけのものでもない。現代の苦悶がもしくだらぬものならば、室町のそれも十九世紀のそれもくだらぬのだ。長編ひとつに盛りこめるほどのドラマを密室に埋め

てしまった小林秀雄の眼に、なぜ現代の凡庸人の苦痛が尊く映じないのか。⁽⁵⁰⁾

おそらくここに小林と福田との根本的な差異が現れている。ちなみにここで福田が展開している「現代の凡庸性」擁護論は後述の彼の戦時中の議論にも見いだすことができる。そこにも戦前・戦中から戦後に至る彼の問題意識の一貫性を確認することができる。福田は、保田や小林から影響や刺激を受けつつも、彼ら以上の熱意でもって「凡俗的自我」の探究に取り組んだということができよう。そしてその探究は戦後になると、独自の演劇論的人間観に発展して行った。福田は昭和二五年に発表した書下ろし評論『藝術とはなにか』（要書房）において、「藝術家の——いや、人間の——素面マツマツなどというものは、眼も鼻もない、まったくのつぺらぼうにすぎません。この世に個性などというものは存在しない——もしそれを仮面と同義語に解さぬかぎり、とにかく二十世紀の小説家たちは、はじめてそういうことを理解したので。個性というものもまた仮面にすぎぬことがわかったので。いいかえれば、かれらは自己の個性を演戯しようとしたのだ——演戯することによってのみ個性は実在しうるのだから」と論じている。このような見方は、続編の「人間・この劇的なるもの」『新潮』昭和三〇年七月号—三二年五月号）でさらに深められることになる。そしてそれは、一九七〇年代以降のポスト・モダンの演劇論的・仮面論的

な人間・社会観の先駆的議論として高く評価することができる。⁽⁵²⁾

次に三つ目の論点に移ろう。それは、昭和七年から一一年の時期に日本の青年知識人の間で大きな話題となった「不安」心理の問題を福田がどう捉えていたかという点である。当時の「不安」心理の広がり背景には次のような要因が存在した。まず、第一次大戦後の西欧における「近代的自我」の解体の意識とそれに伴う「不安」の広がり影響である。その影響が日本にも及んだのである。第二の要因として、社会の状況変化が挙げられる。当時は高等教育の大衆化が始まり、大卒が特権階級ではなくなりつつあった。そこに昭和二年の金融恐慌に端を発した経済不況が重なり、「知識層の失業も「知識階級職業紹介所」で学校出の失業者を日雇に周旋するほど深刻で、へ大学は出たけれど」という言葉が流行した⁽⁵³⁾。またこのような経済上の「不安」状況に加え、多くの青年知識人の心の支えとなっていたマルクス主義運動が国家の弾圧により後退に向かい、反対にファシズムが台頭してくるという状況の中で政治的な「不安」も生じつつあった。

こうした重層的な「不安」状況を背景に、昭和八年には三木清の「不安の思想とその超克」が発表された。また昭和九年にはシユストフ『悲劇の哲学』が翻訳され、この本を扱った三木の論考「シヤストフ的不安」は大きな注目を集め、そのタイトルは流行語ともなったのである。

さてこの問題に関する福田の見解は以下の二点にまとめられることが

きる。一点目は、「不安」の原因は「自意識」にあり、よって「自意識」を克服すれば「不安」は解消するという指摘である。福田の言葉を見ておこう。

天才の論理を用ひ乍ら、その血液を有たぬといふ不均衡を、われわれは不安と呼んでいる。それはまた、頹廢（デカダンス）の俗人文化がもつ別の名でもある。⁽⁵⁴⁾

如何なる我執の徒にも訪れるところの、何等高貴な清浄さも有たぬ孤独、即ち不安にほかならぬ。⁽⁵⁵⁾

福田は、「不安」の原因を、自己の「凡俗」を否認する「自意識」に求めているわけである。言い換えると、「凡俗的自我」の甘受こそが「不安」の根本的解決策であるというわけである。ここにも福田の自我論の主張を再確認することができる。近代的自我を身にかけているという精神的な特権性を根拠に物質的にも特権階級として君臨していた知識階級であるが、その根拠が崩壊したのであれば、特権階級からの転落という運命を甘受すれば良いという見方である。保田与重郎は昭和九年の文章「反動期の精神」で、「あらゆる情勢の不快の圧迫と、生活の不安の中に於て、自己を追求すればする程、つひに空虚な自己を見出すであらう。自己がどこにも何によっても安心して立つところがない。……結局僕らは絶大な無にたどりつくようである。

ある⁽⁵⁶⁾と述べているが、福田は「無」をそのまま甘受すれば、そこに新たな生の基盤が築かれるという立場であったということができよう。福田の見解の二点目は次の文章に示されている。

不安を提唱し、それを取り扱ふ作家の手つきが慎重の度を加へ、ますます巧妙化する程、彼の作品の中からは、現実の不安はいつの間にか逸脱しているといふ奇怪な状況が見られる。凡人にあつては、如何に深刻な身振りを気取らうとも、常に悲劇は上層に浮揚し去り、本来の軽躁性のみが残留するのだ。⁽⁵⁷⁾

つまり、「不安」という問題そのものが知識人の「虚栄」心の餌食になつていくことに対する批判である。この福田の批判には、小林秀雄の「不安がなければインテリ面ができない」(『紋章』と『風雨強かるべし』とを読む)、『改造』昭和九年一月号⁽⁵⁸⁾という批判的指摘に通ずるものがあるといえる。福田の目には、おそるべき貪欲さで、あらゆる機会を捉えて自己の「優越性」の証明に明け暮れる知識人の姿が映つていたのであろう。次項では、自国の「戦争」ですら自己主張の手段にしようとする知識人に対する福田の批判を確認することになる。そしてこれも後述するが、このような福田の批判の視点は戦後にも引き継がれていくことになる。

さて、次に四点目に移ろう。繰返しになるが、福田は、近代

我の信用が失墜した以上、知識人の没落は当然であると考えていた。今や知識人は一般の社会人と変わるところの無い存在である。それゆえ、知識人も社会人としての責任意識や倫理意識を身につける必要がある。言い換えると「社会的自我」の確立が求められる。このような福田の考え方は、横光論の中の「われわれ(現代日本の知識人——引用者注)の社会生活に於ける倫理こそ問題なのだ」という指摘や、「年輪の美しさ——クラシシズムの常識——」(『文藝』昭和一八年六月号)における次の言葉に伺われる。

もし作家概念の変遷史といふものが考へられるなら、その職業としての独立、その人間としての純粹と優越——それがやうやく作家の自覚を喚び、社会にも認められてきた時期に人間の理想像を標榜してたつた白樺派は、所詮、波にのつた人々の甘さを脱しきれぬものではなかつた。かれらは生活に於いても作品に於いても自我をほしいままに放射して願はず、しかも他我からなら致命的な拒絶を受けなかつたのである。一言にしていへば、日本の現代作家の多くは、白樺派以来、社会人として大いに甘やかされ寵遇されてきたのである。⁽⁵⁹⁾

福田は、知識人や芸術家もまた社会の中で他者と共生しなければならぬ時代が到来したと考えていたわけである。とはいえ福田は、社

会に包摂されない個人を全く認めなかったわけではない。むしろ福田は、「個人的自我」の存在の肯定を求めている。つまり福田の主張は、「個人的自我」と「集团的自我」の両方の肯定と確立に置かれていたのである。そのことは、「ロレンス」「アポカリプス論」覚書（『新文学』昭和一七年一〇月号）に示されている。そこで福田は、「個人的自我」と「集团的自我」の相互の肯定と確立を説くロレンスの主張を共感をもって紹介している。ロレンス＝福田によれば、人間存在は、「個人」として存在する側面と、なんらかの「集団」に帰属して存在する側面の二つの面を有している。そしてこの両面の肯定こそが安定した人生や均衡ある社会を実現するというのである。それにしても、「個性」概念を根本から否定した福田が、「個人的自我」という言葉にどのような意味を込めていたのか気になるのである。しかし、本稿の対象時期である戦前・戦中の福田の文章からはこの問いを解くヒントは得られない。その手がかりはむしろ戦後の文章の中に見いだすことができる。⁽⁶⁰⁾戦前・戦中の福田は、近代的な「個性」概念に代わる別の概念に基づいて「個人的自我」を確立する必要があると考えていた。しかし、その新たな概念を創出することはできなかった。この問いは戦後に持ち越されたのである。この点については後述の「おわりに」でもう一度触れたい。

ところで、このような人間における「個人」的側面と「社会」的側面の合理化の問題は福田にのみ見られたものではない。例えば小林秀

雄は、その「私小説論」（『経済往来』昭和一〇年五月～八月号）において有名な「社会化した私」論を展開している。そこで小林は、西欧近代の文芸・思想では、「社会における個人」という主題、言い換えると「個人性と社会性との各々に相対的な量を規定する変換式の如きもの新しい発見」が課題とされてきたと指摘し、現代日本の作家にもその問題の共有を求めた。⁽⁶¹⁾また哲学者の三木清（二八九七—一九四五）もその「ネオヒューマニズムの問題と文学」（昭和八年）において、「社会性と人間性との結合」による「新しい人間タイプ」の形成を唱えている。⁽⁶²⁾福田の議論はその独自の自我論に発しつつも、これらの年長の論者たちからの影響と刺激の中で形成されたものであるということができよう。

さて最後に、福田の古典主義への言及についても確認しておきたい。そもそも「個性」的人間を重視するロマン主義と、「型式」による人間の鍛錬と完成を目指す古典主義とは対立する思想的立場にある。歴史的に見ても、ロマン主義を批判して、古典主義が登場したわけである。それゆえ、ロマン主義的人間観を批判した福田が古典主義（クラシシズム）的人間観を志向するのは当然の成り行きであるといえる。福田は「造型への意志を」（『東京新聞』昭和一八年四月一八日）において次のように論じている。

現代の文学に欠けているものは精神である。精神のみの知ってい

るあの造型意志である。(中略) 造型意志とは人間の完璧性をめがけ、それを型式をもつて捉へようとする意志にはかならない。⁽⁶³⁾

また福田は、「年輪の美しさ——クラシシズムの常識——」(『文藝』昭和一八年六月号)において次のように論じている。

明治以前、僕たちの祖先は武士道に鍛へられ、町人もまた肚といふ言葉のうちにかれらの人間的完成をめざしてゐた。僕たちはただそれに代るものをもちえずして現代に至つたのである。⁽⁶⁴⁾

福田は、このような見解に基づいて、「型」による自己鍛錬を経て「老年」に「人間的完成」を実現する人生を評価する。そのモデルとされたのは室町時代の芸術家で能の大成者である世阿弥である。福田は言う。「世阿弥もまた老年にすべての完成を賭けるクラシシストであつた」と。⁽⁶⁵⁾

しかし、このような古典主義に対する関心もまた、福田にのみ見られるものではなかった。例えば前出の三木清「ネオヒューマニズムの問題と文学」(昭和八年)において、「新しい人間タイプ」はまさに「型」として説かれている。またこの論考は、「私は今日のクラシシズムの代表者」と述べるアンドレ・ジイドの議論を参照している。⁽⁶⁶⁾ 当時において古典主義の再評価は一つの動向を形成していたと見ることも

できよう。

福田の議論は、他の論点と同様、その独自の自我論に発しつつも、同時代の動向からの影響と刺激の中で形成されているのである。そして同様に、この問題をめぐる福田の思索は戦後に引き継がれていくのである。

以上、(一)戦前・戦中の福田の自我論を概観し、(二)その位置づけと意義づけを試みた。次項では、以上に見た福田の議論と関連する形で展開された戦時期における福田の知識人批判論を検討したい。それによって、戦前・戦中期における福田の思想の全貌が明らかになるものと思われる。

三 福田の戦時期知識人批判論

福田は「太平洋戦争」・「大東亜戦争」⁽⁶⁷⁾が勃発した翌年の昭和一七年以降、戦時期における知識人の態度を問題化した文章を数多く発表している。以下、時系列に沿って挙げよう。「生活と文学の混同」(『新文学』昭和一七年三月号)、「日本語普及の問題——政治と文化の立場」(『新潮』昭和一七年四月号)、「ロレンス『アポカリプス論』覚書」(『新文学』同年一〇月号)、「文学至上主義的風潮について」(『新潮』昭和一八年二月号)、「文学報国会評論随筆部会発言」(『日本学芸新聞』同年四月一日号)、「一億総配置につけ! 諸家問答(アンケート回答)」(『新潮』同年

一月号)、「国運」(『新潮』昭和一九年五月号)、「同時代の意義」(『新潮』昭和二〇年二月号)。以下これらの文章に拠りながら、福田の戦時期知識人批判論の論点を、上述の自我論との関連に着目しつつ、また同時代の状況と関連づけながら、全体的に見ていこう。

まず第一に、福田の批判が、戦時体制の中で浮上した知識人の「権力欲」に向けられている点に着目したい。

昭和一五年七月の第二次近衛内閣成立から翌昭和一六年にかけて、戦時体制の構築を目的として、国内のあらゆる分野の再編と統合を目指した「新体制」運動が推進された。文化の領域に関しては、大政翼賛会の文化部がその母体となった。文化部は「文化の新体制」の確立を唱え、知識人・文化人の積極的な参加を呼びかけた。知識人の「権力欲」はこのような状況に乗じて姿を現した。「新体制」に伴う地位と権力を得ようと策動する知識人の出現である。⁽⁶⁸⁾

そのような動向は福田の周辺でも見られた。昭和一六年一二月に当時刊行されていた五〇数誌の同人誌が、「新体制」のもと八誌に統合され、日本青年文学者会という組織に帰属することとなった。当時福田が同人として参加していた第二次『作家精神』もそのうちの一誌である『新文学』に統廃合された。⁽⁶⁹⁾ その日本青年文学者会のうちにも「権力欲」に駆られた人々が現れた。福田はこのような動向を捉えて、「生活と文学の混同——同人雑誌二月月号月評——」(『新文学』昭和一七年三月号)において次のように批判した。

最後に『青年作家』(八誌の内の一誌——引用者注)の狂態について一言したい。同じ青年文学者会の雑誌として、われわれはその編者に対して反省を求めざるを得ないのだ。文壇を乗取らうといふ下劣な野心は、君達の軽蔑するといふ既成文壇と較べてどちらが卑しむべきものであるか。「強きものを倒せ」といふ標語こそは如何なる世界に於ても無力な弱者達の卑劣な合言葉であった。(中略)それはもはや文学者としての態度ではなく、野心と策動にみちた陋劣な政治意識ではない。(中略)われわれはただ編集を始めた二三の同人諸君に猛省を促すのみである。⁽⁷⁰⁾

自我論で何度も論及されたD・H・ロレンスの言葉が引用されていることから明らかなように、ここには自我論における「権力欲」の問題化との連続性を見てとることができる。なるほど自我論で主題化されたのは精神面における「権力欲」であった。しかしそれは当然ながら物質面における「権力欲」とも関連している。したがって、第一項では省略したが、福田は知識人の「唯物的」な「権力欲」の問題にも光を当てている。例えば横光論において福田は、「唯物的な欲望」そのものについては肯定する。しかし、「大義名分の下に現実社会に於ける金銭、地位、権力、成功に対する激しい野心」⁽⁷¹⁾を隠し持った「知的俗物」には厳しい批判の眼を向けるのである。福田は今見た

「生活と文学の混同——同人雑誌二月月号月評——」と同年に発表した「日本語普及の問題——政治と文化の立場」(『新潮』昭和十七年四月号)においても、「新体制」に便乗して「処世」を凶る知識人の態度を批判している。⁽⁷²⁾

しかし福田が批判した状況はこの後も続き、昭和十七年二月の大本言論報国会の発足以降さらに過激化したようである。⁽⁷³⁾ この組織の中枢を占めたいわゆる「国内思想戦」グループについて、経済学者で評論家の大熊信行(二八九三—一九七七)は、戦後の文章で次のように回想している。「文筆活動をもつていかにして総合雑誌に進出できるか、さらにはいかにして総合雑誌を仲間たちで占拠し、これを「同人雑誌」化できるか、ということがかれらのただ一つの夢であり、熱望であり、そして戦争末期のあの暗い日々こそは、かれらのためにその嬉しい夢が実現した時期であった。(中略)わたしの眼に映ったものは、ジャーナリズムにたいするかれら仲間の食指のうごきであり、その意識の卑しさだけである」⁽⁷⁴⁾。また作家の高見順(一九〇七—六五)も戦後の著作で、「戦時中、右翼的言辞によつてひとびとを苦しめた人間の中には、それこそ立身出世欲のかたまりのようなものがいたものである。立身出世欲に燃えながら立身出世を実現しえず、そのための人間的な歪みから、ひとに嫌われたり敬遠されたりしていた人物が、このときはばかりにファシストになつた。立身出世にそれを利用したのである。こういう人物が一番悪質であつた」と回想している。⁽⁷⁵⁾

福田の言論はこのような当時の動向に対するリアルタイムの批判として稀有なものであり、評価に値するといえよう。福田は昭和十九年に発表した「国運」(『新潮』五月号)においても改めて、「僕は現在——余人は知らぬ、文化人とか文学者とかいはれるものの処世を願つて汲々たるすがたにみづから忸怩たるものを覚えるのである」⁽⁷⁶⁾と述べている。

ところで当時、福田の他にも類似の批判を展開した論者がいた。福田より一世代上で、当時の代表的な知識人であつた林達夫(一八九六—一九八四)や前述の保田与重郎である。

林は昭和十五年の講演「反語的精神」で「いまわれの周囲にぞくぞくと輩出しつつある思想的アリヴィスト(立身出世主義者)にすぎない、哲学者の仮面をつけた山師や曲芸師」という言葉で「新体制」に便乗する知識人を批判している。⁽⁷⁷⁾ 実は当時から福田は林のことを「尊敬すべき思想家であり批評家」と敬慕していた。戦後になると林も福田を高く評価するようになる。林は福田の最初の単行本である『作家の態度』(中央公論社、昭和二年)を編集するのである。この点に触れて福田はのちに、林は「私の書く物を認めてくれた最初の人」⁽⁷⁸⁾であつたと述べている。また林は「これ『作家の態度』——引用者注)は中央公論社で、ぼくが全く自力でスカウトし、手がけたばく自身の処女出版でもあり、当時この力量ある無名の新人を世に送り出すことにぼくは大きな誇りと期待とをもつていた」と回想している。福田と

林との接点については他稿でも触れているので参照を願いたい。⁽⁸⁰⁾

保田与重郎もまた、前述の同人雑誌の統合問題に触れた文章の中で、文学を志す青年が、「精神の珠玉」を志向するものと、文芸を「職業」視するものとに分化しつつあると述べ、後者の「立身出世の考え方」を「悪風」と呼んで、批判している。もちろんこの時期の保田にとって「精神の珠玉」はその独特の日本賛美論に結びついており、福田や林の議論とはニュアンスを異にしている。しかし、ここにも福田と保田を繋ぐ接点を確認することができるといえる。

次に、第二の論点に進もう。それは知識人の「自意識」に対する問題化である。これもまた上述の自我論の問題意識の展開として捉えることができる。

福田は「同時代の意義」(『新潮』昭和二〇年二月号)で次のように論じている。

一つの不愉快な風俗である——青空に編隊をなして滑って行く白銀の敵機をきれいだと感じるのは、いや、それを奇妙に強調するのは一体どういふ心理であらうか。僕もまたその美(?)を感じないとは言はない。しかし気になるのは、誰もが言ひあはしたごとく殊更に主張するその語調である。それが度かさなるごとに僕として一種の邪推を起さざるをえないのだ——彼等は敵機がきれいだといふことより、戦争といふ危険の真只中に身を置いて、しかもなほその

美を感得したことにそのことに満足しているのではあるまいかと。⁽⁸¹⁾

福田は「戦争」を利用して自己の精神的優越性をアピールする知識人の「自意識」とその「自己陶醉」を捉え、批判しているのである。

その上で福田は、「もし、この戦争を転機として新興日本の次代の美感と、それに基づく生氣ある文化とが誕生するとすれば、それは敵機に美を感得する芸術家や文化人のなかからではなく危険を感じて待避する日常人のなかから起るものでなくてはならない」と述べ、知識人・文化人との対比で、「自意識」に囚われない「日常人」を称揚する議論を展開している。

そしてこの議論は、当時の国威発揚に伴う日本賛美という「風潮」の中で、「完成せる伝統と過去」を「基準」として「現代」やそこに生きる「日常人」を「鞭うつ」文化人の「特権意識」に対する批判にもつながっていた。福田は前掲「同時代の意義」で次のように論じている。

法隆寺の完成せる美を基準として、現在の東京の街並を粗雑なるものと軽侮するたぐひである。そのやうな美意識は祖先の明分(名分の誤植であろう——引用者注)に借りて、現在幾多同胞の血を流して戦っている祖国に対し許しがたい侮蔑を加えるものであらう。

僕はあらゆる冷たさといふものに対して猜疑の眼を向けざるをえ

ない。僕は粗雑であり、戦争の重荷に耐え、受けた傷を秘め隠さうとしている東京に限りない愛情を覚える。芸術を失ひ、美意識を忘れ、満員電車で揺られながら毎朝職場に通ふその住民たちに深い信頼感を寄せている。幾多の文化的な遺産と同列に、場末の廃業したそばや、裸にされた街路樹を愛惜する。それらは僕にとつて動かすべからざる同時代だからだ。⁽⁸²⁾

このような「同時代」に対する知識人の「冷たさ」を批判して、「同時代」を「愛惜」する心を説く態度には、「凡俗の倫理」論に通じるものを読み取ることができよう。

次に、福田の知識人批判の三点目に移ろう。それは「文化主義」に対する批判である。福田は、「文学至上主義的風潮について」(『新潮』昭和一八年二月号)において、「戦争」という「現実」の「政治」に対して「文化」や「文学」の立場から観念的にアプローチしようとした当時の知識人の動向を、「文化主義」又は「文学至上主義」と呼び、その問題を次のように指摘している。

感傷的な文化主義者たちは国民的感激の名のもとに実は己が卑小さな個人的陶醉に耽けり、しかも他方、現実に対する責任を解除されているがゆゑに、かれらの自己陶醉を束縛する現実の桎梏をのがれて際限なく上昇し、美辞麗句の陰にはただ話手の誇大な表情のみが

残るのである。⁽⁸³⁾

ここには上述の「自意識」批判の論点も見られるが、ここでは、知識人の「無責任」な態度に対する福田の批判に注目したい。福田は同論考の別の箇所でも、「現実」への「責任」を背負って「政治」に当たっている政治家や官吏に比して、知識人は「発言権だけあつて、責任は解除されている」と批判し、「僕は文化主義の名のもとにあらゆる放縦無責任な思惟を一括して否定し去りたいのである」と述べている。ここに、他者に対する「倫理的」「責任」を説いた福田の自我論の主張の反映を見ることができよう。

またこのような福田の「文化主義」批判は、「政治」の領域から、それを利用する知識人・文化人を切り離し、「政治」の領域的自立性を確保することを目指した議論として捉えることもできる。福田は前掲「文学至上主義的風潮について」において次のように論じている。

一篇の歌より、一隻の船舶、一台の爆撃機こそ今は必要なのだ。現代に於いて、作家はかならずしも歌をうたひ、小説を書く必要はないのである。⁽⁸⁴⁾

これを裏返せば、福田の「文化主義」批判は、戦時体制の中で「文学」の自立性の擁護を試みた議論であったということもできる。その

ことは福田の「歴史文学もない、戦争文学もない、劫初以来ただ文学の心あるのみである」という言葉にも間接的に示されていよう。このように福田の「文化主義」批判は、「政治」と「文化」が癒着した当時の日本の状況に対して、その切り離しを求めた議論であったと解釈することもできる。

ところでこのような福田の議論には、作家・坂口安吾の言説と重なるものがあったといえる。坂口安吾は福田の「文学至上主義的風潮について」と同年の昭和一八年の六月に発表した文章で次のように論じている。

飛行機があれば勝つ、さうときまつたら、盲滅法、みんなで飛行機をつくらうぢやないか。そんなとき、僕は筆を執るよりもハンマーをふる方がいいと思ふ。その代り、僕が筆を握っている限り、僕は悠々閑々たる余裕の文学を書きたい。文学の戦時体制は無⁽⁸⁵⁾力、矛盾しやしないか。

ここに福田の言説との明らかな共通性を確認することができよう。⁽⁸⁶⁾ 当時福田と坂口安吾には面識はなかったが、戦後になると互いに評価し、信頼し合う間柄となった。坂口安吾は昭和二二年の文章で福田を「傑れた評論家⁽⁸⁷⁾」と評価し、福田は同年に刊行された坂口安吾の最初の選集の全巻の解説を任されている。⁽⁸⁸⁾ また昭和二〇年代前半の時期、

二人の文章にはお互いへの評価を伴った言及を数多く確認することができる。このような両者の関連の詳細については他稿を期したい。⁽⁸⁹⁾

第四の論点に移ろう。それは、当時の自己優越的・排他的ナショナリズムの広がりとそれを煽る知識人の動向に対して、へ弱い日本という観点を対置して、反省を促した点である。福田は昭和一八年三月に開催された日本文学報国会の評論随筆部会の集まりにおいて次にように発言している。

大抵文藝評論家として出発された方にはいつの間にか非常に景気のいい政治評論家になつてしまふといふことが、今の文藝評論の実際ではないかと思ひます。⁽⁹⁰⁾

その上で福田は、明治の日露戦争における旅順攻略戦に象徴される近代日本の苦しい道のりに言及しつつ、「日本人の弱み」に向き合う姿勢を求め、「評論家といふものもやはりさういふ気持ちの弱みといふ所から出発して行かなければ本当の仕事が出ない」という言葉で発言を締め括っている。⁽⁹¹⁾ 福田はこの発言の翌月に発表された「芸術の日本的更新（文学編）」（『新文化』昭和一八年四月号）においても、次のように論じている。

飛鳥の夢をおひ、芭蕉の句のこころを掴むとき、僕たちはその智

慧に打たれないであらうか。彼等は、知つてゐたのである——自己の弱味を悲しいまでにとほしみ、そのかなたの世界を憧れるみちを。彼等の夢や憧憬はつねに現身の醜悪につながつてゐた。だが、この自己の弱味と醜悪を愛惜することから出発しなむならば、僕たちはその他のどこに自己更新の道を切り拓きうるであらうか。⁽⁹²⁾

「弱味と醜悪」の「愛惜」を説く議論には、前述の「同時代」への「愛惜」を説く議論に重なるものがある。また「凡俗の倫理」論との連続性を確認することができる。

ところで、上述の福田の会合での発言について、その場に居合わせた英文学者で評論家の吉田健一（一九二一—七七）は、戦後の文章で次のように回想している。「福田氏に順番が廻つて来ると、福田氏は立ち上つて、いきなり、「日本人の弱さといふものに就て反省したいと思ひます。」と言つた。それから旅順に行つて二〇三高地を登り、その記念塔の前に立つて感慨無量だつた話をして、もう一度、「今こそ日本人の弱さに就て反省したい」と言つて腰を降した。戦争中に聞くことが出来た極く少数の骨がある発言の一つで、それで福田氏の名前が記憶に残つた⁽⁹³⁾」。福田の発言が勇気に満ちた貴重なものであったことが伺える。

なるほど、福田には国策機関に勤務していた経歴がある。彼は、大卒を卒業した年の徴兵検査で兵役免除（丙種合格）となり、上述のよ

うに大学院を経て、中学教師、「形成」の編集者を勤めた後、昭和一六年に旧師の国語学者・西尾実の紹介で文部省外郭団体の日本語教育振興会に入り一九年まで在職し、その間外地の日本語教師のための雑誌『日本語』の編集に携つていた。また昭和一九年の春からは旧知の社会学者・清水幾太郎の勧めにより、評論家の坂西志保が主幹を勤める太平洋協会アメリカ研究室の役員として勤務している⁽⁹⁴⁾。この研究室は政治家・作家の鶴見祐輔の主宰による国策機関で、アメリカ、中国大陸、南方諸国の研究・調査を任務としていた⁽⁹⁵⁾。

しかしそこには、戦争を「無責任」に煽つたり、戦争に便乗して自己の利益を追求しようという姿勢は見られない。現に福田は、昭和一八年に文芸批評家の平野謙から言論統制の中枢機関であった内閣情報室への入室を打診されたが、断つて⁽⁹⁶⁾いる。また上述の太平洋協会アメリカ研究室における福田の同僚は、経済学者の都留重人や、鶴見の令嬢で社会学者の鶴見和子、同じく鶴見の令息で哲学者の鶴見俊輔⁽⁹⁷⁾など、戦争便乗の姿勢の見られなかった人々であった。そして何よりも、この項で見た、福田の戦時期の言説こそが、当時の福田のスタンスを物語っている。

戦争の勝利に向けて国家の一員としての「責任」を果たそうとする一方で、戦争を自己のために利用しようとする卑しい動向を批判する。これが戦時期の知識人としての福田のスタンスであったといえる。そしてそれは、独自の自我論に由来するものであったということ

ができる。

ところで、福田の戦時期知識人批判の観点は、戦後の福田の知識人批判論にも引き継がれていくことになる。その証拠は多くの文章に確認することができるが、ここではその一例として、福田の戦後最初の社会評論である「民衆の心」〔『展望』昭和二年三月〕を簡単に見ておきたい。⁹⁸

この論考で福田は、敗戦によってもたらされた「民衆」の「道義頹廢」に対して批判的なポーズをとることで、自己の優越化を図ろうとする知識人の動向に対して批判を投げかけ、次のように述べている。

敗戦の現実はいかに醜く惨めである。しかし、それがいかに醜く惨めであらうと、ぼくたちはこれ以外の場所に自分の立ち上がるべき地盤をもたないのだ。民衆がいかに頼りなく見えようとも、またいかに背徳と頹廢とのうちに陥つてゐようとも、それはけつして鞭打すべき対象としてではなく、そのまま自分の姿として、そのうちにぼくたち自身の生活を置かねばならないのである。ぼくたちは素手で出発しなければならぬ。⁹⁹

ここに「弱みと醜悪」の甘受からの出発を説いた戦時期知識人批判論との連続性を確認することができる。またこの論考には、戦後の時点から改めて「戦争中における文化人の政治活動」に見られた「権

力欲の満足」の追求を問題化している箇所も確認される。

福田の知識人批判の観点は、戦時期から戦後まで一貫して変らなかつたといえることができる。それは福田が批判した問題が、戦後においても知識人の間で克服されることが無かつたということの意味であろう。この点の検討を含む戦後の福田の知識人批判論の全体的な考察については他稿を期したい。¹⁰⁰

おわりに

——「凡俗の倫理」論におけるD・H・ロレンスから
福田への影響——

以上、戦前・戦中期における福田の思想の全体像を見てきた。この時期の福田の思想の核心は、近代的「個性」概念の批判の上に立つ「凡俗の倫理」の提唱にあったと見ることができ、福田の議論は、全てこの主題に関連し、収斂していくといえるからである。「凡俗の倫理」は、〈凡俗的自我〉の甘受によって「自意識」を克服し、他者に対する「温かい心」や「愛」を説くものであった。ここでは、その「凡俗の倫理」の発想がD・H・ロレンスからの影響をもとに形作られたものであるということについて確認しておきたい。その手掛かりとなるのが、福田の次の二つのロレンス論である。一つは、昭和一〇年一二月に東京帝国大学英文科に提出した卒業論文「Moral Prob-

Jems in D. H. Lawrence] (D・H・ロレンスに於ける倫理の問題)である。もう一つは、「ロレンス『アポカリプス論』覚書」(『新文学』昭和一七年一〇月号)である。前者は現在、所蔵不明により閲覧が不可能の状態にある。しかし、文芸評論家の磯田光一が、東大英文科の助手時代にこれに目を通しており、その内容を紹介、批評した一文を残している。⁽⁹⁾「福田恆存の卒業論文——演劇精神との関連にふれて——」(『月報85』『日本現代文学全集』103巻 田中千禾夫・福田恆存・木下順二・安部公房集)講談社、一九六七年)である。それによると福田は卒論で、「遠く失われてしまった人類の「楽園」を、どのようにして奪還するか」ということ、いいかえれば「現代人にとって愛は可能か」という問題を、(中略)『チャタレイ夫人の恋人』や『息子と愛人』を素材にしなから、たどたどしい英語で論じている」という。つまり福田の卒論は、「凡俗の倫理」を主題としたものであり、その探求は、ロレンスからの影響と刺激のもとで行われているというわけである。⁽¹⁰⁾

「ロレンス『アポカリプス論』覚書」(『新文学』昭和一七年一〇月号)にはこの点がさらに明確に示されている。

かれ(ロレンス——引用者注)が「チャタレイ夫人の恋人」の終末に於いて到達した救ひは、もはや激しい情熱ではなく、『温かいところ』、『やさしいところ』であつたことを想ひ出すがよい。⁽¹¹⁾

以上の二つの文章から、戦前・戦中の福田思想の核心である「凡俗の倫理」論には、ロレンスからの大きな影響が存在すると指摘することができよう。そもそも福田のロレンス体験は、ロレンスの書簡集(『ロレンスの手紙』)に出てくる「愛」に関する言葉から始まっている。それは次の言葉である。

今、ベエトヴェンの書簡を読んでいる。個性の孤独の十字架を、真に身につけてゐない時には、常に誰かを愛し、何人かと接触を求めてゐるね。⁽¹²⁾

福田はこのロレンスの言葉に「近代を感じた」という。福田はロレンスを通して、「近代」的「個性」と「愛」との間に存在する二律背反について学んだのである。この問題を全面的に論じたロレンスの本が『アポカリプス論』(一九三〇)である。それゆえ福田は、この著作から最も影響を受けたといえる。福田は昭和一六年に、この書を翻訳し、フランス文学者・評論家の渡邊一夫(一九〇一—七五)の紹介で白水社から出版する予定であった。しかしそれは、「当時の情勢から実現不可能」となった。しかし福田は、戦後の昭和二六年に、この本の翻訳刊行を実現している。その題名は「現代人は愛しうるか」とされた。その「後書き」で福田は、「人間を造りかえる力をもった書物というものは、そうめつたにあるものではないが、この『アポカリ

『ブス論』はそういうまれな書物のひとつである。すくなくとも、ぼくはこの一書によって、世界を、歴史を、人間を見る見かたを変えさせられた」と述べている。また福田は、白水社版の絶版後に刊行された筑摩書房版（昭和四〇年）の「まへがき」では、「私はこの書によって目を開かれ、本質的な物の考え方を教わり、それからやっと一人歩きが出来る様になったのである」と述べている。さらに同書が昭和五七年に中公文庫に収められた際には、その「文庫版訳者あとがき」で、「私に思想というものがあるならば、それはこの本によって形造られたと言つてよいだろう」と記している。

このように福田思想の核心におけるロレンス及びその『アポカリプス論』の影響は決定的であり、またそれは、生涯を貫くものであったということが出来る。しかしその影響の内容については、戦前・戦中と戦後とで、変化が見られる。そこで最後に、その中心的な点について見ておきたい。ここでは、福田が『展望』昭和二二年五月号に発表したロレンス論「近代の克服」を確認しよう。そこで福田は、次のように論じている。

個人はつひに愛することができぬ。(中略)我意と個性とはつひに自分のうちの愛し手を殺さねばならぬ宿命にあるのだ。ひとびとはなによえそのことをはつきり是認しないのか。(中略)ぼくたちは愛するためにはなんらかの方法によって自律性を獲得せねばならぬ。

近代は個人それ自体のうちにそれを求め、そして失敗した。自律性はうちに求めるべきではない。個人の外部に——宇宙の有機性そのもののうちに求められねばならぬ。ぼくたちは有機体としての宇宙の自律性に参与することによつて、みづからの自律性を獲得し他我を愛することが出来るであらう。愛は迂路をとらねばならぬ。それは直接相手に向けられてはならぬ、クリスト教もそれを自覚していた。が、ロレンスはその迂路をば、宇宙の根源を通じることによつて発見した。それはあきらかに神を喪失した現代に一つの指標を示すものであらう。(中略)ロレンスの脳裡にあつた理想人間像はいまやあきらかである——人間は太陽系の一部であり、カオスから飛び散つて出現したものとして太陽や地球の一部であり、胴体は大地とおなじ断片であり、血は海水と交流する。^(註)

ここに見られる〈生命主義〉的な視点こそが、戦後の福田のロレンス論の特色であるといえる。そしてそれはそのまま、戦後の福田思想の基調ともなつて行くのである。例えば、第二項で、戦後の福田が「個性」や「理性」に代わる概念で「個人的自我」を根拠づけようと試みたと指摘したが、上述の引用文からも伺えるように、「宇宙の有機性」こそが「個人的自我」を支える概念とされた。たしかに戦前・戦中の福田においても、その「天才」概念の内には〈生命主義〉的な発想が見られた。横光論では、「天才」は「宇宙意志」を反映した存

在として定義されている。そしてその対比で、「凡俗」は、「宇宙意志」と切り離された存在とされている。このように「宇宙」の「根源」との「生命」的なつながりは、「天才」と「凡俗」を区別する指標となっていた。⁽¹⁰⁾しかし戦後の福田は、「天才」と「凡俗」の区別無く、全ての人間が「宇宙」の「根源」につながり得ると見る考え方に变化したのである。そして全ての人間が、「宇宙」の「根源」との合一化によって、他者を「愛する」ことができるようになるのである。ロレンスはそもそも「生命主義」的な色彩の強い文学者と見なされている。戦後の福田は、その側面に力点を置いてロレンスを受容し、自己の思想を発展させて行ったことができる。

以上、戦前・戦中期の福田の思想の全貌について見てきた。次の課題は、戦後の福田が、戦前・戦中期に形成した思想をどのように発展させていったかという点の解明になろう。この課題は、他稿において探究しよう。

注

- (1) 福田の昭和一〇年代の論考の多くは戦後単行本に収録されるにあたって大幅な改稿が加えられている。
- (2) 拙稿「昭和二〇年代前半の福田恆存(上)——「新しい人間」の思想史から——」(『麗澤学際ジャーナル』二〇〇八年三月) 参照。
- (3) 以下原則として、カギ括弧内は福田自身の言葉である。またヤマ括弧内

は、福田自身は使用していないが、福田の思想を説明する際にキーワードとなると思われる言葉である。

- (4) 福田恆存「別荘地帯」(『演劇評論』昭和一一年四月号) 一二九頁。『福田恆存全集』(文藝春秋社、以下『全集』と略記) 未収録。
- (5) 現在この論考は、遠藤浩二「福田恆存と三島由紀夫の『戦後』・第四回・掌中の『孤独』」(『正論』二〇〇六年八月号) 一三〇—一三二頁における引用文を通してのみ、その論述の一部を伺うことができる。本稿も遠藤論文の引用文に依拠している。
- (6) 上記「漱石の孤独感」が公開されていない現在の観点からの判断である。
- (7) 福田恆存「横光利一と『作家の秘密』——凡俗の倫理」(『行動文学』昭和一二年二月号) 一一頁。横光論は、戦後単行本『作家の態度』に収録されるにあたって大幅に改稿されている。ロレンスの言葉を引用したプロログや副題の「凡俗の倫理」も削除されている。
- (8) 同上、一三頁。
- (9) このことは後述のマクベス論、嘉村磯多論、芥川龍之介論など昭和一〇年代の福田の文藝批評に共通して指摘することができる。
- (10) ロレンス『アポカリプス論』(一九三〇年)におけるヘルサンチマンの議論を検討したものに、Fanny & Giles Deleuze「Nietzsche et Saint Paul, Lawrence et Jean de Patmos: preface de D. H. Lawrence: Apocalypse, traduit en français par Fanny Deleuze」Editions Bolland/France-Adel, 1978。フアーニー・ドゥルーズ&ジル・ドゥルーズ「情動の思考」(鈴木雅大訳、朝日出版社、一九八六年)。Colin Milton「Lawrence and Nietzsche, a study in influence」Aberdeen University Press, 1987(西尾幹一「行動家・福田恆存の精神を今に生かす」『諸君』二〇〇五年二月号、二二五頁参照)がある。
- (11) 前掲横光論、二四頁。上記注6に記したように、横光論は戦後に大幅に改稿されている。この箇所についても、戦後に刊行された単行本に所収の

- 論考やそれに依拠した『全集』所収の論考からは削除されている。
- (12) 横光には、新約聖書の黙示録を手がかりに現代世界の特質を敗者と勝者の分裂と闘争に見た評論「黙示のペーシ」(『読売新聞』大正三年一月二一日)がある。この点については神谷忠孝「横光文学の出発——「黙示のペーシ」を中心に——」(『横光利一論』双文社出版、一九七八年所収)参照。
- (13) 福田恆存「三月の作品」(『演劇評論』昭和二年四月号)六八頁。『全集』未収録。
- (14) 福田恆存「リアリズムと批評の問題」(『日本記録』昭和十一年一〇月号)、『全集』未収録。
- (15) 同上、一二七頁。
- (16) 自筆「年譜」(『全集』第八卷、文藝春秋社)六六九頁。
- (17) 自筆「年譜」(『福田恆存著作集』第八卷、新潮社)二七七頁。
- (18) この論考は現在、所蔵不明により閲覧が不可能の状態にある。従って本稿では、戦後になり、『批評』昭和二年四月号に再録された論考に依拠した。
- (19) 「マクベス」(『批評』昭和二年四月号)一九—二〇頁。『全集』第二卷、一七一—一九頁。
- (20) 同上、一三三頁。『全集』第二卷、二七頁。
- (21) 同上。
- (22) 「人間・この劇的なるもの」(『新潮』昭和三〇年七月号〜三二年五月号、『全集』第三卷所収)や「幸福への手帖」(『若い女性』昭和三〇年九月号〜三一年二月号、『全集』第四卷所収)などの論考を参照。
- (23) 『新潮』昭和七年八月号掲載の匿名時評「文藝ノート」には次のように記されている。「作家の態度に於いて、その作風の真摯で、真面目な点に於いて、横光利一氏や、嘉村磯多氏などは、現在の文壇関係の人々や、文学志望者などの間に於いて、尊敬もされているし好感も持たれていることは、随一の方だらうと思う」(四頁)。福田は、この二人の時代の寵児との関わりにおいて、横光を苛烈に批判し、嘉村を高く評価することとなったのである。

- る。
- (24) 福田恆存「嘉村磯多」(『作家精神』昭和一四年三月号)八九頁。横光論と同様、戦後単行本に収録されるにあたって改稿が施されている。『全集』第一卷、一〇四頁。
- (25) 同上、九一頁。『全集』第一卷、一一二頁。
- (26) 同上、九四頁。『全集』第一卷、一〇六頁。
- (27) 『全集』第八卷所収の自筆「年譜」には、「中学時代の旧師西尾実の世話により、古今書院の新雑誌「形成」の編集に携る。八号にて廃刊。この「形成」編集の時、岸田國士、小林秀雄、田中美知太郎を識る」と記されている。この雑誌の「刊行の辞」には、「世界的日本文化の創造」という現代の課題のために「現代に立脚して日本文化の伝統を究明し、日本文化の伝統に立脚して現代生活を批判する」ことを目指すと記されている。またこれに関連して福田は「エイローネイア」(『月報』田中美知太郎全集)第六卷、筑摩書房、昭和六年所収、『全集』未収録)において次のように回顧している。「私が初めて田中美知太郎氏の文章に接したのは「思想」に載った「エイローネイア」である。これは後に改題されて、今度の全集第一卷に「ミソログス」として収められている。(中略)当時の「思想」は誌名通り思想、哲学の雑誌であり、読むに値する論文が月に必ず一つか二つは載つてゐたが、私は他の誰の物よりも田中氏の論文を待ち焦れた。その頃、偶々古今書院より「思想」の大衆版とも言ふべき「形成」といふ雑誌が刊行され、私とその編集に携る事になつた時、まづ第一に書いて頂かうと思つた筆者は言ふまでもなく田中氏である。私は編集顧問格の二三人に「田中氏が如何に立派な思想家であるか」について懸命に説明した。なぜなら当時の田中氏は今日ほど大家ではなく、顧問達は一人として田中氏の書いたものを読んでゐなかつたからである」(三三頁)。これは福田と田中美知太郎の関連を辿る上で重要な回顧であるといえよう。福田の依頼によって寄稿されたのは、『形成』昭和一五年一月号に掲載された田中美知太郎「日蝕」である。当時の件に関する田中側の回顧は自叙伝「時代と私」(『文藝春秋』

- 昭和五十九年、三二二—三二三頁)の中に存在する。その田中の回想と関連させて福田を論じたものとして上述の金子光彦『福田恆存論』(近代文藝社、一九九六年、七一—〇頁)がある。
- (28) 「芥川龍之介論(序説)」「作家精神」昭和一六年六月 二四頁。芥川論もまた戦後に大幅な改稿が見られる。
- (29) 同上、二七頁。
- (30) 同上、二七頁。
- (31) 同上、一一頁。
- (32) 同上、二四頁。
- (33) 同上、二四頁。
- (34) 同上、二八頁。
- (35) 保田与重郎「ルツインデの反抗と僕のなかの群集」(『コギト』昭和九年一月号) 五四頁。『保田与重郎全集』第三卷(講談社、一九八六年) 一七九頁。
- (36) 保田与重郎「二つの論文(新しき芸術学への試み)——文学時評」(『コギト』昭和七年七月号) 三九頁。『保田与重郎全集』第六卷(講談社、一九八六年) 二六八頁—二六九頁。
- (37) 菅原潤『昭和思想史とシェリング 哲学と文学の間』(萌書房、二〇〇八年)は、保田、中島、松下の議論を詳細に検討している。彼らに「凡人」論が存在することについては、この著作(特にその「第六章・松下武雄の芸術論」)に教えられた。
- (38) 戦前・戦中期において、福田が保田に直接言及しているのは、「文藝批評の態度」(『文芸』昭和一九年二月号)における次の箇所だけである。「透谷以来わづかに数人の批評家が、意識するとしなやかにはならず、(中略)ジャンルとしての小説にいくたびか不信の表明をなしてきた。(中略)生田長江は小説に対する疑惑をかすかに予感していた——時代の賜物といはねばならない。しかし、最初にこの疑惑をはつきりと不信にまで意識した文藝批評家を求めるならば、僕はその功を小林秀雄氏に帰するの躊躇しな

い。氏は近代の西欧文学への味到から、その影響のもとに成長したわが国の明治以後の小説にジャンルとしての不具を感得した最初の人である。が、氏とはまったく別に、わが国の文国(ママ)の伝統から小説に不信を言明した批評家に保田与重郎がいる。僕はいま両氏の業績の全面にわたって評価する必要をみとめない。ただ文藝批評のジャンルとしての自立性を意識的に主調(ママ)した点に注意をうながしたいのである」(二三頁)。このような福田の保田評価についても、その文藝批評観を含め、改めて検討する必要がある。ところで前述のように、福田が編集者を務めた雑誌『形成』(古今書院)の創刊号(昭和一四年二月号)には、保田与重郎の評論「文学的といふこと」(『保田与重郎全集』第七卷、講談社、一九八〇年所収)が掲載されている。福田の依頼によるものと考えられることもできよう。

(39) 保田から福田への影響という点に触れたものとしては、谷崎昭男「福田恆存」(『ポリタイア』第二卷二号、近畿大学出版部、昭和四四年)を挙げる事が出来る。そこで谷崎は、「若い日の福田氏が最も多く学び、ついにはよく自家の葉籠中のもとした」のは保田の「イロニーの説」であり、「イロニーの説こそが芥川龍之介の文学を解き明かす大きな鍵」(五七—五九頁)であったと論じている。この指摘を受けて、文芸評論家の磯田光一は福田善之との対談「福田恆存・逆説的幻想の論理」(『戦後思想家論』現代評論社、昭和四六年)において「これは日本浪漫派系の『ポリタイア』という雑誌に谷崎昭男という人が書いているもので、その人の説によりますと、福田恆存の文学にいちばん大きな影響を与えたのはロレンスでも英文学でもなく、保田与重郎だというんです。それで彼の説によると、戦争中に発表したいいくつかの文章、「芥川龍之介論」などを戦後になって改稿するとき、保田与重郎的な言葉使いをほとんど削っているというんです。そうしますと、保田与重郎によって象徴される日本的な伝統主義から、敗戦を境にして近代主義に転向してきた、という福田恆存観が成立するんですね」(五一—五二頁)と述べている。しかし、本稿で明らかにしているように、福田が「保田与重郎によって象徴される日本的な伝統主義」に立脚していたと

いう見方は成り立たない。保田から福田への影響は、本稿で述べたように、自我論の文脈において把握すべきであろう。また戦後に大幅に改稿された芥川論にも、「血統」など保田的な用語がそのまま残されている。ただ、谷崎も指摘するように、「イロニー」は「アイロニー」と書き換えられ、その使用頻度も減少している。谷崎は「ツルのように」(『文学界』平成七年二月号、二一九頁、『花のなごり——先師 保田与重郎』新学社、一九九七年、二五一頁)において、「脚光を浴びるはなやかな席を福田氏が用意されたのにひき替えて、戦後という時代は保田与重郎をどんなふう待遇したか。公職追放の処分を以て臨んだという一事を想起するだけで足りることであるが、保田の文学はしかし死んだのではなかった。廃れずに、それは福田恆存の裡によく生きている。その証を福田氏の著作の端々に見て取った私は、氏を保田与重郎の後継者に擬えた」と述べている。谷崎の見解を含め、保田と福田の関連に関する詳細な検討が待たれる。筆者も別稿にてこの課題に取り組みたいと考えている。

(40) 壇一雄『太宰と芥川』(沖積舎、一九八九年)一〇八頁。

(41) 二人の出身校は、東京市立錦華尋常小学校(現在の御茶ノ水小学校)である。ちなみにこの小学校は、夏目漱石も輩出している伝統校である。福田と高橋は、第二東京市立中学校(現在の上野高校)でも同級生であった。ちなみに哲学者の山崎正一も同級生であった。福田はその後浦和高等学校(現在の埼玉大学)に、高橋は高知高等学校(現在の高知大学)にそれぞれ進学している。福田の浦和高等学校時代の同級生には、国語学者の金田一春彦や政治家の原文兵衛などがいた。

(42) 高橋義孝「感性の人」(『月報』『保田与重郎全集』第十巻、講談社、一九八六年)一一二頁。

(43) 野口富士男『感性的昭和文壇史』(文芸春秋、一九八六年)二一七頁。紅野敏郎はその『昭和文学の水脈』(講談社、一九八三年)において次のように指摘している。「七冊目の『行動文学』(昭和十二年二月)には、若き日の福田恆存が「横光利一と『作家の秘密』——凡俗の倫理」という評論を

寄稿していることにも注目しておくべきであろう。さきの「作家精神」での高橋義孝といい、この「行動文学」での福田恆存といい、若書きのものであるにせよ、昭和十年代のとつばなで、すでにその評論活動を開始している風景がここにある。つまり「近代文学」関係者の活動開始地点に踵を接しているのである」(三六五頁)。ここにも福田と高橋をセットで扱う視点が見れている。この点に関しては次の小田切秀雄の回顧も目に止まる。「戦時中——引用者注)民主主義ということばさえ使わなかったが、わたしたちが一九世紀ロシア文学や日本近代文学の批評・研究に熱心だったのは、それらのうちに屈折した形でひそめられている近代的・民主主義的要求の根強さへの共感、それをとり上げることでひそかな当代批判・当代文学批判ということのためであった。プロレタリア文学とは無縁だった福田恆存や高橋義孝がそのころ日本近代文学に関する文章を書いていたのも、わたしたちとあい通ずるものがあつたためである」(『文学と近代主義の問題——回想を通して——』『現代日本思想大系』第三四巻「月報」、筑摩書房、一九六四年、二頁)。ちなみに福田が同人参加した雑誌とその刊行時期、順番は次の通りである。「行動文学」(昭和十二年六月)、「昭和十二年二月」↓第二次『作家精神』(昭和十二年五月)、「昭和十六年一月」↓「新文学」(昭和十七年二月)。これらの雑誌に関して紅野前掲書は次のように解説している。「『行動文学』は『行動』(昭和八年一月)〜(一九〇九年九月)のあとを受けて、船橋聖一・豊田三郎・小松清らが中心となった同人誌であるが、四号まで出して、従来の同人制を改め、船橋・小松は退き、豊田三郎一人が宰領し、それに「作家精神」側の五人が加わって続刊され、続刊後三冊出してつづれた全七冊ほどの雑誌である」(三六四―三六五頁)。第一次『作家精神』は、「豊田三郎・高木卓・真下五一・木暮亮・鷹匠匠一郎・近藤忠ら東大独文系の人々に、坪田譲治や福澤一郎も応援して出していた同人誌「意識」と、野口富士男らの「現実・文学」が合併して出来た」(三六二頁)ものである。ちなみに「作家精神」には、若き日の高橋義孝が「変革の美学」を寄稿している(三六四頁)。第二次『作家精神』については次のよう

に解説されている。「行動文学」にひきつづいて第二次「作家精神」（昭和二年五月〜一六年一〇月）が発刊されていくが、これは当時のこの種の同人誌としては比較的長命で、この時代のものとしては当然記録しておくべきものに属する。同人は第一次の木暮・高木・野口・真下・松岡らが中心で、それにいくらかの移動があったが、「自己の独自性の発見とその発展に対する不断の精進」というシンプルな構えが長命の原因になったものと察せられる。第一号には、岡田三郎が絶賛した「飛びゆく」の続編を「風の系譜」（のちの代表作『風の系譜』とは別個）と題して野口はゆるやかにその才能を開花させていく。同人は、のち正宗白鳥の研究者として著名となる後藤亮やドイツ文学畑の佐藤晃一や「行動文学」の側から接近のあった福田恆存、さらに高橋義孝・麻生種衛・倉本兵衛・桜田常久・岡本謙次郎・谷丹三、それに最後のほうでは小島信夫などまで加わり、坪田譲治や小寺菊子らの応援寄稿もあり、昭和十年代文学の有力同人誌としての実力を充分に持つに至る。しかもこの「作家精神」にも、いわゆる昭和十年代の、転向、抵抗、戦争協力などに関する事項が、ほとんど表面に浮かび上がっていない。（中略）「風の系譜」から「東京慕情」へとつながる野口の制作活動、福田恆存の、嘉村磯多や芥川龍之介に関する評論、桜田常久の「平賀源内」、これらもまた、昭和十年代文学の一収獲であると私は見たい。ちなみに、第二次『作家精神』には社会学者・評論家の清水幾太郎も同人参加している。最後の『新文学』に関しては次のように解説されている。「従来出ていた五十数誌の同人誌が、警視庁の命令で「自主統合」の末、八誌として残存していたのだが、そのうちの二誌が、「作家精神」その他数誌を吸収した「新文学」である。（中略）旧「作家精神」グループがあくまでも中心となった同人誌である。また（中略）、太平洋戦争勃発後の民族的昂揚の雰囲気はあまりうかがえない。古典について語っても、神がかり的言辞はいささかも使われていない。福田恆存・高橋義孝の、静かで勁い姿勢がまず人の目をひく」（四〇三〜四〇五頁）。『新文学』は、「福田恆存・高橋義孝らの本領を発揮した場所でもあった故、八誌の中でもっとも戦後へ

つながる要素を含みこんでいた雑誌として、安易に忘れ去ることはできぬ」（四〇八頁）。

(44) 「誠実といふこと——小林秀雄との出あひ——」（『文藝評論』昭和二十四年四月号）一—二頁、『全集』第一卷、三八六—三八七頁。「叙事詩への憧れ——偶然にまかせて選んできた書物——」（『日本読書新聞』昭和二十七年九月一五日）七頁、『全集』未収録。

(45) 「アンドレ・ジイド」（『岩波講座・世界文学』第五卷、昭和八年）六一—七頁、『小林秀雄全集』第二卷（新潮社、二〇〇一年）三四六—三五二頁。「手帖II」（『新潮』昭和八年四月号）七三頁、『小林秀雄全集』第二卷（新潮社、二〇〇一年）三二五頁。

(46) 福田恆存「叙事詩への憧れ」（『日本読書新聞』昭和二十七年九月一五日）七頁、『全集』未収録。昭和一〇年前後の時期、ジイドは日本の知識人から最も関心を抱かれた文学者であったといえる。斎藤正直「ジイドの問題と知識人」（『近代文学』昭和二十四年三月号）では次のように論じられている。「現在わが国でも二十代乃至四十代前期の知識人達のうちには、彼の不安の文学や自意識の問題、無償の行為、更にはコンミュニズムへの転向といった事件をぬくにしては彼等の思想の生成過程を考へられない人達もあるだらう。（中略）ジイドの名が彼の作品とともに漸く文壇の関心の的となり、やがて問もなく彼の名とともに不安の文学、自意識の文学、純粹小説論といった一種斬新な現代的課題が文壇ジャーナリズムの主流にのし上つて行ったのは昭和七、八年頃から十四、五年頃にかけてのことである」（二五頁）。小林のジイド論やその影響を受けた福田の議論がこのような当時の文脈の中でどのような位置にあるのかという点についても検討が必要であろう。

(47) 福田恆存「別荘地帯」（『演劇評論』昭和十一年四月号）一三〇頁、『全集』未収録。

(48) 福田は横光論、マクベス論、嘉村論などにおいて、作者と主人公を同一視して、作品を享受・批評している。そこから、福田その人に作品におい

- ても、作者が主人公という等式が成り立っていると受け取ることができる。
- (49) 小林秀雄「Xへの手紙」(『中央公論』昭和七年九月号) 八一頁。『小林秀雄全集』(新潮社) 二六〇—二六一頁。
- (50) 福田恆存「誠実といふこと」(『文藝評論』第二集、昭和二十四年四月) 一四頁。『全集』第一巻、四〇〇—四〇一頁。
- (51) 福田恆存「芸術とはなにか」(『要書房』昭和二十五年) 六七頁。『全集』第二巻、六〇八頁。
- (52) 荻部直「政治と偽善 丸山眞男・福田恆存の論争から」(『大航海』二〇〇一年一〇月号) は、戦後における丸山と福田の論争を整理・検討しながら、福田の演劇論的人間観と丸山眞男の「偽善」論について、その異同と意義を論じている。また田中久文『九鬼周造』(ベリかん社、一九九二年) は、「近代的人間観の見直しの中で、最近のアメリカ社会学においても人間の行動を演技として捉える『役割理論』などが登場しているが、和辻や九鬼の演技論も当然近代的自我の在り方への批判という文脈の中から登場したものであろう」(八八頁) と指摘している。福田の議論とここで挙げられている和辻哲郎や九鬼周造らの議論との比較検討も課題である。尚和辻の議論に関しては荻部直『光の領国 和辻哲郎』(創文社) 参照。ちなみにポストモダンの演劇論的人間・社会論の代表的な論者であった哲学者の中村雄二郎は、若き日に福田を中心とした勉強会「アルプス会」(昭和三二年) に参加していた。他のメンバーには、作家の小島信夫、英文学者の中橋一夫、哲学者の山崎正一などがいた(『年譜』『全集』第八巻参照)。
- (53) 荒川幾男『昭和思想史』(朝日新聞社、一九八九年) 七—八頁。
- (54) 前掲横光論、一一頁。
- (55) 同上、一一二頁。
- (56) 保田与重郎「反動期の精神」(『文学評論』昭和九年四月号) 六六—六七頁。『保田与重郎全集』(第二巻、講談社、一九八五年) 二六七—二七六頁。
- (57) 前掲横光論、一一二頁。
- (58) 小林秀雄「『敎章』と『風雨強かるべし』とを読む」(『改造』昭和九年一月号) 三三—三三頁。
- (59) 福田恆存「年輪の美しさ——クラシシズムの常識——」(『文藝』昭和八年六月号) 四五頁。『全集』未収録。
- (60) この論点に關しても他稿を期したい。福田恆存「二匹と九十九匹と——ひとつの反時代的考察——」(『思索』昭和二年春季号、『全集』第一巻所収) などを参照。
- (61) 小林秀雄「続・私小説論」(『経済往来』昭和一〇年七月号) 四六—四六八頁。『小林秀雄全集』第三巻(新潮社、二〇〇一年) 三七八—四〇八頁。
- (62) 三木清「ネオヒューマニズムの問題と文学」(『文藝』創刊号、昭和八年一〇月) 一—六頁。『三木清全集』(第一巻、岩波書店、一九六七年) 二—五—二四頁。
- (63) 福田恆存「造型への意志を」(『東京新聞』昭和一八年四月) 三三頁。『全集』未収録。
- (64) 福田恆存「年輪の美しさ——クラシシズムの常識——」(『文藝』昭和八年六月号) 四六頁。『全集』未収録。
- (65) 同上。
- (66) 前掲三木清「ネオヒューマニズムの問題と文学」一—六頁。『三木清全集』(第二巻、岩波書店、一九六七年) 二—五—二四頁。
- (67) 福田は「年譜」(『全集』第八巻) では、「大東亜戦争」と表記している。福田の「太平洋戦争」・「大東亜戦争」観についても検討する必要がある。
- (68) 北河賢三「戦争と知識人」(『日本史ブックレット』65) 山川出版社、二〇〇三年) 六一—九〇頁。
- (69) 前掲紅野書、四〇—三—四〇六頁。辻橋三郎『昭和文学ノート』(桜楓社、一九七四年) 九七—一〇二頁。平野謙『昭和文学私論』(毎日新聞社、一九七七年) 四七—四七六頁。高見順は『昭和文学盛衰史』(文藝春秋社、一九七八年) において「当時の同人雑誌というものを全体として見ると、右翼的偏向からかたくみずから守っていた。暴力的言辞が跳梁していた当

時、それは随分と苦しいことだつたろうと思うが、その苦しさにたえなから、いまにも絶えようとする文学の火をみずからのうちに守りつづけていたという事実は特記しておかなければならない。(中略)さらに私は、あの「日本青年文学者会」という同人雑誌組織が、ひとつの防波堤になつていたのでという事実をも確認した。当局の方針にまるで迎合するようなあつた団体の組織、そして当局の統制方針に呼応するようなあの同人雑誌の統合は、当時、いろいろと批判され、そこに問題もあつたようだが、同人雑誌の作家たちはああして団結して、あれで防波堤を作つていたので、いまとなるとそれが分るのである。」(三七二—三七三頁)と述べている。

(70) 福田恆存「生活と文学の混同——同人雑誌二月月号評——」(『新文学』昭和一七年三月号) 一一二頁。『全集』未収録。

(71) 前掲横光論、二二頁。

(72) 福田恆存「日本語普及の問題——政治と文化の立場」(『新潮』昭和一七年四月号) 三〇—三五頁。『全集』第一巻、四八五—四八九頁。

(73) 前掲北河書、八八—九〇頁。

(74) 大熊信行『戦中戦後の精神史』(論創社、一九七九年) 六二八—六二九頁。

(75) 前掲高見順『昭和文学盛衰史』二六七—三六八頁。小熊英一『民主』と『愛国』戦後日本のナショナリズムと公共性(新曜社、二〇〇二年) 四七頁参照。そこでは次のように指摘されている。「一九四二年五月には日本文学報国会、同年十二月には大日本言論報国会が組織された。これらの組織に加入しなければ、原稿の依頼がなくなる可能性が大きかった。そして隣組や町内会がそうであつたように、こうした組織の結成は、幹部が会員の生殺与奪権を把握しうることを意味した。こうしたなかで、知識人たちの暗闘がはじまった。この時期には、従来から自分と対立していた者に、「唯物論的」ないし「自由主義的」な過去があると密告すれば、相手を社会的に葬ることは容易だった。また逆に、国策団体の主導権を握つたり、軍や官庁と結びつけば、論壇を支配する権力をもつことも可能だったのであ

る。

(76) 『国運』(『新潮』昭和一九年五月号) 一七頁。『全集』第一巻、五二五頁。

(77) 林達夫「反語的精神」(『林達夫著作集5』平凡社、一九七一年) 一一頁。この講演は戦後に活字にされ、発表された(『新潮』昭和二年六月号、六〇頁)。

(78) 福田恆存「沈黙と微笑」(『林達夫著作集4』『月報』平凡社、一九七一年) 一五頁。『全集』未収録。

(79) 同上。

(80) 拙稿「昭和二〇年代前半の福田恆存(上)——「新しい人間」の思想史から——」(『麗澤学際ジャーナル』二〇〇八年三月) 七頁及び一七頁。

(81) 「同時代の意義」(『新潮』昭和二〇年二月号) 二頁。『全集』第一巻、五二八頁。

(82) 同上、三頁。『全集』第一巻、五二九頁。

(83) 福田恆存「文学至上主義的風潮」(『新潮』昭和一八年二月号) 四〇頁。『全集』未収録。

(84) 同上。福田は『新潮』昭和一八年一月号のアンケート「一億国民戦闘配置につけ」(情報局発表の国内態勢強化断行について・東條首相の「官民の告ぐ」の放送について)に関する回答文の中で、「われわれの第一に思ふべきは武力戦に勝つことを措いて何もありません」(一〇頁)と述べている。

(85) 坂口安吾「巻頭随筆」(『現代文学』昭和一八年六月号) 頁数表記無し。

『坂口安吾全集』第一四巻(ちくま文庫、一九九一年) 四七四頁。

(86) 高見順のいわゆる「文学非力説」との関連性も気になるところである。辻橋三郎『昭和文学ノート』(桜楓社、一九七四年) 参照。

(87) 坂口安吾「花田清輝論」(『新小説』昭和二年一月号) 五四頁。『坂口安吾全集』(ちくま文庫、一九九一年) 第一五巻、四六頁。

(88) 『坂口安吾選集』(全九巻、銀座出版社、昭和二年二月—二三年八月)。

- (89) この点に関する先行研究としては、前掲の金子光彦『福田恆存論』（近代文藝社、一九九六年）一一二―一一五頁など。しかし、主體的な検討は未だ為されていないといえる。
- (90) 『日本学藝新聞』昭和一八年四月一日号、五頁。『全集』未収録。
- (91) 同上。
- (92) 福田恆存「芸術の日本的更新（文学編）」（『新文化』昭和一八年四月号）三九頁。『全集』未収録。
- (93) 吉田健一「万能選手・福田恆存——その人と作品——」（『別冊文藝春秋』昭和三〇年八月、一三頁。『三文紳士』講談社文芸文庫、一九九一年、一四七頁）。
- (94) 福田恆存「覚書」（『全集』第一巻）六七〇―六七二頁。
- (95) 福田の主な仕事はエーヴ・キュリーの「戦陣の旅」の翻訳などであったようである。自筆「年譜」（『福田恆存著作集』第八巻、新潮社）二七九頁参照。また「特別インタビュー・京都学派と30年代の思想・久野収氏に聞く」（『批評空間』平成七年四月号）二八頁参照。「太平洋協会」に触れたものとしては、鶴見俊輔「人間・鶴見和子15 弟の眼」（『機』一九九九年一月、藤原書店）など。この協会に関する研究は全くなされていないといえる。
- (96) 「覚書」（『全集』第一巻）六六〇―六六一頁。平野謙は、福田の芥川論を高く評価し、福田に注目していたようである。平野は戦後『近代文学』の編集委員の一人として、同誌に福田の芥川論を再録している（しかし、前述のようにこの原稿には大幅な改稿が見られる）。また平野は『近代文学』の第一次同人拡大の際に福田の加入を提案したが、同じく編集委員の本多秋五らの反対で却下されている。この間の事情に関しては、小林広一「幻の『近代文学』から見た戦後史」（『日本文学』二〇〇三年一月）を参照。ところで、戦時中、平野が福田に対して実は批判的だったという証言もある。この点に関しては杉森久英『大政翼賛会前後』（文藝春秋社、一九八八年）第六章参照。
- (97) 清水幾太郎『わが人生の断片』（上）（文藝春秋社、一九八五年）一一二―

一一三頁。哲学者の久野収は前掲の「特別インタビュー・京都学派と三〇年代の思想・久野収氏に聞く」において、福田と太平洋協会アメリカ研究室に触れて次のように述べている。「『太平洋問題調査会』——戦後、これはマッカーシー旋風の中で左翼の同伴者組織と指名されて、糾弾されました——という坂西志保さんが班長の研究室の会があつて、福田恆存君も、清水幾太郎たちと一緒に、そのメンバーになっていました。久野は「太平洋問題調査会」と述べているが、これは福田の所属した「太平洋協会」とは別の組織である。共に鶴見祐輔が中心に関与しているため勘違いしたのであろう。ところでこの後に久野は、同誌編集委員で批評家の浅田彰及び柄谷行人のインタビューに答えて次のように発言している。「浅田・福田恆存は、その頃は左翼にかなり近かったわけですね。久野・アメリカのニューデール左派と同様、近かった。柄谷・戦後にむしろ保守派になった。戦後皆が左翼進歩派に転向してきたので反発したんでしょうね。久野・戦後、福田君はほくらに、おまえら左翼は反省しろと言いましたが、やりきれなかったんじゃないですか」。ここで指摘されている事柄の是非については改めて検討が必要であろう。また上記のインタビューに関連して、柄谷は福田の追悼文「平衡感覚」（『新潮』平成七年二月号）で次のように論じている。「私はさる十月に久野収にインタビューしたとき、戦争期の福田恆存について尋ねた。それは、数学者の森毅が戦争中の福田恆存はすばらしかったという回想をどこかで書いていたことがずつと気になっていたからだ。（中略）戦後の福田はそのことを一切語らなかつた。『全集』の覚書でも、それに触れていない。ただ、平野謙に情報局の後任として勧められたとき断つたことや、戦後に彼の最初の本『作家の態度』が林達夫の称揚によつて出版されたことが書かれているのを見れば、戦争中の福田恆存の姿勢をある程度推測することができる」。本稿の見解はこの柄谷の見方に近い。

(98) 拙稿「昭和二〇年代前半の福田恆存（上）」——「新しい人間」の思想史から——」（『麗澤学際ジャーナル』二〇〇八年三月）四頁及び二、一三頁。

- (99) 福田恆存「民衆の心」(『展望』昭和二年三月号) 八六頁。『全集』第一巻、五四四頁。
- (100) 福田による戦後知識人の心理的問題の主題化に関しては、拙稿『戦後文学』の思想」(荻部直・片岡龍編『日本思想史ハンドブック』新書館、二〇〇八年)を参照願いたい。
- (101) 磯田は「福田恆存氏の卒業論文は、いつか機会があつたら読みたいと思つていたのであつたが、数年前、東大英文学研究室の助手をつとめていた私は、どこかにはずだと思いつながらなかなか発見できずにいたのを、たしか助手をやめる前年の大掃除のさいに、埃にまみれた研究室の片隅から、ついに発見することができたのである。(中略)A4版のタイプライター用紙に、英文タイプで五十八頁にわたる論文である。」と記している。しかし現在、英文学研究室を含め、東京大学に所蔵は確認されていない。
- (102) 磯田光一「福田恆存の卒業論文——演劇精神との関連にふれて——」(『月報』『日本現代文学全集』103巻 田中千禾夫・福田恆存・木下順二・安部公房集』講談社、一九六七年)三—四頁。
- (103) 昭和九年から一二年にかけて日本では、ロレンスに関するブームが起きた。昭和十一年だけでも翻訳書が一七冊刊行されている。昭和一〇年度の東京帝国大学英文科の卒業論文は全三六本のうち四本がロレンスであった(『D・H・ロレンスと現代』日本ロレンス協会、一九九五年、二六七—二六九頁)。その中に福田のものも含まれる。福田は「ロレンス『アポカリプス論』覚書」(『新文学』昭和十七年一〇月号。『全集』未収録)において、「当時わが国にロレンスが紹介され、その熱がやうやく昂まらうとしてゐたとき」(二〇二頁)にロレンスに出会つたと記している。
- (104) 前掲福田恆存「ロレンス『アポカリプス論』覚書」一〇七頁。
- (105) 同上、一〇二頁。
- (106) 同上、一〇三頁。
- (107) 福田恆存「近代の克服」(『展望』昭和二年五月号)五五—五六頁。『全集』第一巻、三九—四二頁。
- (108) 前掲横光論、一二三頁。
- *川久保 剛(かわくほ・つよし)
一九七四年生。上智大学卒業。専攻日本思想史。現在、麗澤大学外国語学部国際交流・国際協力専攻助教。著者『日本思想史ハンドブック』(荻部直・片岡龍編、新書館、二〇〇八年、共著。論文『昭和二〇年代前半の福田恆存(上)——「新しい人間」の思想史から——』(麗澤学際ジャーナル)第一六巻第一号)など。